

中学校選択の構造に関する考察 —88年・07年の子ども・保護者調査の結果から—

○樋田大二郎（青山学院大学）
子安 潤（愛知教育大学）
土橋 稔（世田谷区立給田小学校）
荒川英央（日本橋学館大学）

○木村治生（ベネッセ教育研究開発センター）
邵 勤風（ベネッセ教育研究開発センター）
宮本幸子（ベネッセ教育研究開発センター）
○橋本尚美（ベネッセ教育研究開発センター）

第1節 問題の設定—「中学校・大選択時代」の到来—

（1）20年前の「中学受験」と現在の「中学選択」

本報告では、ベネッセ教育研究開発センター（1988年当時、福武書店教育研究所）が行った「中学受験調査」（1988年）と「中学校選択に関する調査」（2007年）のデータをもとに、「選択」と「業績競争」に焦点を当て、中学進学をめぐる意識と行動の分析を行う。

1）20年前の「中学受験」

ベネッセの第1回「中学受験調査」は今からおよそ20年前の1988年に実施された。当時は私立中学にとって追い風の時代であった。公立中学の「荒れ」やゆとり路線による英語と数学の時間数削減などで公立中学への不安が一気に高まった。

さらにこの当時、東大入学者数で私立の中高一貫校が躍進したことなどで中高一貫制が注目され、中高一貫の私立中学が新設されたり、中等部を開設して中高一貫化する高校があらわれたりした。また、当時はバブルの真っ只中にあり、有名デザイナーによる制服デザインに象徴される、消費としての私立中学教育があこがれの対象となった時期でもあった。

しかしこの時代は、中学受験をする者にとっては大変な時代でもあった（もちろん、違う意味で今でも大変であるが・・・）。私立中学進学は周囲の人々から平等性や共同性（共同体としての学校）を傷つける行為であると見なされ、隠れて受験したり、ひどいときには小学校教師から陰に陽に受験を妨害されることもあった。

2）現在の「中学選択」

今回、20年ぶりに調査を行った。調査タイトルを「中学受験」から「中学選択」へと変更した背景には、受験（検）機会の増加がある。私立中学の増加、私立中学の受験機会（試験日）の複数化、公立中高一貫校の誕生、そして公立中学への学校選択制の導入などである。

公立セクターにも公立中高一貫校という選抜（適性検査）のある中学が誕生し、平成19年には全国で149校を数える。さらに少なくない地域で公立中学校の学校選択制が取り入れられ、平成18年の段階で13.9%の市区町村、東京だと23区中19区に及んでいる。こうした結果、20年前には大多数の子どもが何も考えずに地元の公立中学に進学していたのだが、そうした子どもは今は少数派になりつつある。程度の差はあるものの、多数の子どもが巻き込まれて中学を選択する時代、「中学校・大選択時代」⁽¹⁾になったのである。

3）「業績」から「選択」

P.ブラウンはペアレントクラシーとの関連から、選抜原理の2つの式をあげている⁽²⁾。「能力+努力=業績」と「資源+嗜好=選択」である。これらのうち、イギリスでは「業績」から「選択」へと選抜原理が移行しているというのがブラウンの分析である。

日本は、長い間、学歴競争の激しい社会であると考えられてきた。そして、多くの子どもが業績争いに参加してきた。しかし今日では上述のように、私立中・国立中の受験機会の増加や公立中高一貫校の設置、公立学校選択制の開始によって、教育を「選択」する機会が増えている。さらには、学習時間の分極化の現象に見られるように、業績争いに参加しないという“選択”をする子どもも多くなっている。日本とイギリスでは事情が大きく異なるものの、日本は「選択」の場面の多い「中学校・大選択時代」になったのである。

さらに、市場メカニズムの導入について触れておかなければならない。日本では教育に市場メカニズムが導入され、かつては公共財であった教育を私的財と化した。教育が私的財となった時、中学校は「大選択」の対象となったのである。

(2) 選抜のある中学校とない中学校

本調査は「選抜のある中学校」への進学にかかわる意識と行動を全国調査によって明らかにするものである。選抜のある中学とは受験や適性検査のある中学校のことである。

私立中学、国立大学附属中学、公立中高一貫校（中等教育学校と併設型）がこれにあたる。

なお、教育期待を検討する第3節では、地元の公立中学についても、行かせたいという選択の結果、あるいは受験（検）をしないという選択の結果選ばれた中学なのだと考えて考察の対象としている。

私立・国立中学受験者の大半はいずれかの私立・国立中学に進学する。しかしながら、公立中高一貫校受験者は、合格するのはわずかで、大半が地元の中学か公立の学校選択制中学へ進学する。

図表1-1. 中学校の設置者・タイプと選抜方法

設置者	名称	入学者選抜方法	今回分析	備考
私立	私立中学校・私立一貫校	入学試験	◎	全国729校 生徒数で7.1%※1
国立	国立大学附属中学校・中等学校	入学試験	◎	全国 76校 生徒数で0.9%
公立	公立中高一貫 中等教育学校・併設型	適性検査	◎	全国148校※2 首都圏だと受験倍率が10倍を超えることもある。 公立中高一貫校には3類型があり、中等教育学校は高校にあたる後期(3年間)へは無選抜で進学でき、生徒の募集もない(17校)。併設型は中学校から高校へは無選抜で進学でき、高校では生徒募集を行う。同一の設置者による中学と高校を接続(55校)。
		連携型	○	連携型は高校の先生が中学校に出張授業に行くなど既存の市町村立中学と都道府県立高校が連携を深める形で実施(77校)。
	公立の学校選択制対象中学校	定員オーバーの場合に抽選	○	全国の13.9パーセントの自治体が中学校進学段階で導入※3
	一般の公立中学校	選抜無し	○	

※1 平成19年度「学校基本調査」(文部科学省)より算出。学校数は分校を除く。

※2 平成19年8月現在。文科省調べ。

※3 平成18年6月現在。文科省調べ。

※4 本報告では、文脈に応じて“受験”、“受検”、“受験(検)”の言葉を使い分けるが、慣用的な分かりやすさを重視しているので用法は厳密ではない。

(3) 本報告の課題

日本の中学校では「選択肢の多様化と量的拡大（“中学校・大選択”）が同時に進み」→「多様な教育期待がかなえられる」時代がおとずれようとしている。

しかし、そのことは同時に教育に格差（＝縦方向の多様化）を生み出し、「選択」と「業績競争」に参加する子どもに対しても参加しない子どもに対してもその結果を押しつけることになる。

本報告では「中学校・大選択」の現状、およびそれらがどのような「選択」や「業績競争」を生みだしているのか、そしてそれらと親の社会的属性の関連を検討する。イギリスのペアレントクラシーは「選択」の場面で影響力を持つのに対して、日本の中学受験では「業績競争」にもペアレントクラシーが強く影響をしていることも論じたい。

本報告の構成は以下の通りである。

○第2節では、調査の概要を紹介する。

○第3節では、多様化した中学校が親や子どものどのような教育期待や価値意識に応えようとしているのか検討する。まず、親と子の教育期待と価値意識を多変量解析で構造化する。そして、それら（親の教育観、通わせたい中学タイプ、志望校選択基準、子どもの通いたい中学、子どもの志望校選択基準）と中学校のタイプの関係から、多様化した中学が親と子の多様化した期待にどのようにこたえているかを検討する。

○第4節では、88年調査と07年調査の結果を比較する。まず、塾と教育費に焦点を当て、受験（検）のための塾利用と高額な教育費支出とが広がっていることを明らかにする。続いて、社会的属性が受験（検）の有無に与える影響を検討する。公立中高一貫校の設置によって社会的属性の低い家庭の子どもにも受験の機会が開かれているが、社会的属性のとらえ方によっては私立・国立中受験機会の格差は広がっている。

○最後に第5節では視点を変えて、日本的なペアレントクラシーについて考える。受験勉強の世話や情報行動などに焦点を当て、親が子どもの「業績競争」を支援している状況を検討する。このことによりイギリスのように「選択」だけでなく、それに加えて「業績競争」にも影響を与えるペアレントクラシーの日本的・日常的プロセスを明らかにする。

<第1節 注と引用>

- (1) 「学校選択制が導入されていない」もしくは「わからない」でかつ「受験をさせようと考えたことがまったくなかった」と答えた親はサンプル全体の26.3%であった。
- (2) P. ブラウン「文化資本と社会的排除」、P. ブラウン、A.H. ハルゼー、H. ローダー、A. S. ウェルズ [編] 『教育社会学—第三のソリューション』1-90頁、九州大学出版会。

(樋田大二郎)

第2節 調査概要

(1) アンケート調査

<1988年調査（東京23区）>

1. 調査テーマ 小学6年生とその保護者の中学受験メカニズムの解明
2. 調査方法 学校通しによる自記式質問紙調査（保護者は家庭での自記式質問紙調査）
3. 調査時期 1988年10～11月
4. 調査対象 東京23区の公立小学校に通う6年生とその保護者
〔小学6年生〕874名 〔保護者〕816名

<2007年調査>

1. 調査テーマ 小学6年生とその保護者の中学校選択に関する意識と行動の実態調査
2. 調査方法 郵送法による自記式質問紙調査
3. 調査時期 2007年12月
4. 調査対象 ①東京23区 東京23区の公立小学校に通う6年生とその保護者
〔小学6年生〕852名 〔保護者〕852名
②東京23区以外 全国の公立小学校に通う6年生とその保護者
〔小学6年生〕1,421名 〔保護者〕1,424名

※調査対象者は、全国の公立小学校6年生のリストに基づいて無作為に抽出。
小学6年生用の調査票と保護者用の調査票をあわせて郵送し、回収した。

※下の図表にまとめたように、1988年調査の対象は東京23区であり、2007年調査は23区以外の東京および全国のサンプルが含まれている。このようにサンプリングの違いがあるので、単純集計の年次ごとの比較はできない。

図表2-1 2007年調査のサンプル数

	合計	内訳	
		東京23区	全国（東京23区以外）
小学6年生	2,273	852	1,421
保護者	2,276	852	1,424

図表2-2 1988年調査のサンプル数

	合計	東京23区
小学6年生	874	874
保護者	816	816

(2) インタビュー調査

1. 調査時期 2008年6月
2. 調査対象 中学1年生の子どもを持つ母親
〔子どもが在学している中学校〕
 - ①首都圏の私立中学校・国立中学校（難関） 5名
 - ②首都圏の私立中学校・国立中学校（難関以外） 5名
 - ③首都圏の公立中高一貫校 3名
 - ④岡山県の私立中学校・国立中学校・公立中高一貫校 4名
 - ⑤広島県の私立中学校・国立中学校・公立中高一貫校 5名

第3節 保護者の教育期待・子どもの価値意識と学校選択

本節では、2007年調査をもとに、保護者の教育期待や子ども自身の中学校に関する価値意識がどのような構造であるのか、またその構造は、進学する中学校の選択にどのように結び付いているのかを検討する。このことは、多様化した中学校が、それぞれどのような役割を引き受けているのかを検討することでもある。

(1) 分析方法

保護者及び子どもの意識構造を要約して示すために、因子分析を用いた。分析に用いる質問項目は以下の通りである。

- ①すべての保護者を対象にした分析 … 「教育に関する意見や考え」
「子どもをどんな中学校に通わせたいか」
- ②受験（検）予定の保護者を対象にした分析 … 「受験させる中学校を決めるとき重視すること」
- ③すべての子どもを対象にした分析 … 「どんな中学校に通いたいか」
- ④受験（検）予定の子どもを対象にした分析 … 「受験しようと思うのはどんな中学校か」

また、因子得点の平均を、以下に示した希望校のタイプ（図表3-1）ごとに比較して分析を行った。

図表3-1 分析に使用するカテゴリーとサンプル数

希望校タイプ		対象	サンプル数
A	私立中学校(上の方)	「お子様に、中学受験をさせる予定ですか」の質問に「はい」と回答した保護者のうち、「第一志望の学校は、どのような中学校ですか」の質問に「私立中学校」及び、難易度が「上のほう」と回答した人。	109
B	私立中学校(やや上)	同じ質問に、「私立中学校」及び、難易度が「やや上」と回答した人。	89
C	私立中学校(真ん中以下)	同じ質問に、「私立中学校」及び、難易度が「真ん中くらい」「やや下」「下のほう」と回答した人。	88
D	国立大学の附属中学校	同じ質問に、「国立大学の附属中学校」と回答した人。	42
E	公立中高一貫校	同じ質問に、「公立の中高一貫校」と回答した人。	156
F	公立中学校	「お子様に、中学受験をさせる予定ですか」の質問に「いいえ」と回答した保護者。ただし、他のカテゴリーのサンプル数にそろえるため、1750サンプルのうち、ランダムに175人を抽出した。	175
合計			659

(2) 分析結果

1) 保護者の教育観の構造と中学校選択

保護者全体に対して「教育に関する意見や考え」を尋ねた13項目について因子分析を行い、5つの因子を抽出した(図表3-2)。因子は、それぞれ以下のように命名した。

- ・第1因子「学歴・競争志向」 … 一流大学への進学や受験競争を肯定する項目
- ・第2因子「学歴・競争社会認識」 … 学歴社会、受験競争の厳しさの認識に関する項目
- ・第3因子「平等な教育志向」 … 地域などによる教育格差を否定する項目
- ・第4因子「受験回避」 … 受験の苦しみとその回避を志向する項目
- ・第5因子「性に合った教育重視」 … 男らしさ／女らしさを重視する教育を志向する項目

この5因子について、希望校のタイプごとに因子得点の平均を算出したところ(図表3-3)、希望校のタイプによって有意差がみられたのは、「学歴・競争志向」「学歴・競争社会認識」「受験回避」の3因子であった。

図表 3-2 保護者の教育観の因子分析結果

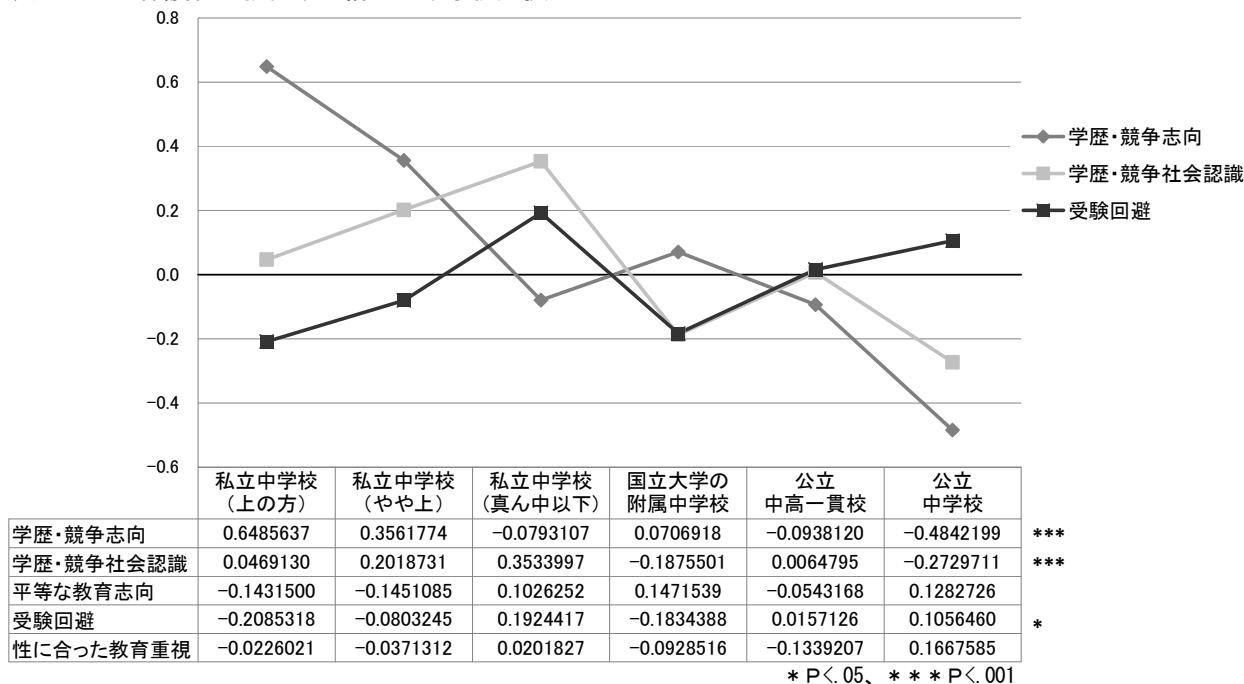
	とてもそう思う +まあそう思う の%	成分				
		学歴・競争 志向	学歴・競争 社会認識	平等な 教育志向	受験回避	性に合った 教育重視
寄与率		20.504	10.785	9.662	8.994	8.116
子どもを一流大学に入れたい	56.5	0.764	-0.125	-0.055	-0.017	-0.049
わが子には受験競争を勝ち抜いてほしい	80.5	0.714	0.178	0.111	0.094	-0.087
多少無理をしても子どもの教育にはお金をかけたい	80.3	0.696	0.215	0.086	-0.097	0.027
親がしっかりしていないと子どもは受験競争に勝てない	64.5	0.611	0.049	-0.015	0.172	0.104
競争によって格差が生まれるのは仕方がない	64.4	0.549	0.015	-0.428	0.048	0.198
今の学区の公立中学校は不安なことが多い	71.7	0.438	0.407	-0.103	-0.109	0.188
今の日本は実力より学歴を重んじる社会だ	67.1	-0.066	0.738	-0.013	0.153	-0.113
受験競争は今後ますます厳しくなるだろう	81.7	0.333	0.589	0.121	0.085	0.163
どんな地域でも同じ教育が受けられるようにすべきだ	86.2	-0.043	-0.111	0.787	0.173	0.101
今の教育にはお金がかかりすぎる	94.5	0.130	0.417	0.609	-0.134	0.024
子どもには受験の苦しみを味わわせたくない	38.6	-0.127	0.239	-0.067	0.781	-0.014
自分は高校(大学)の受験でとても苦労した	27.6	0.266	-0.062	0.154	0.644	0.089
男は男らしく、女は女らしく教育すべきだ	42.2	0.027	0.027	0.075	0.064	0.949

●因子抽出法: 主成分法/回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

注1) 社会観、子ども観を尋ねた3項目(「今の子どもたちは自分の子ども時代よりも幸せだ」「今の子どもには子どもらしさが失われている」「今の日本はお金がものをいう世の中だ」)は分析から除外した。

注2) 「とてもそう思う+まあそう思うの%」は、無回答・不明を除いて算出した。

図表 3-3 保護者の教育観の構造と中学校選択



この3因子について希望校のタイプごとにみても、私立中学校(上の方)を受験させる保護者は、「学歴・競争志向」が強く、「受験回避」の志向は弱い。私立中学校(やや上)、私立中学校(真ん中以下)になるほど、「学歴・競争志向」は弱まり、「学歴・競争社会認識」や「受験回避」の志向が強まる。

また、国立大学の附属中学校を受験させる保護者は、「学歴・競争志向」が私立中学校(上の方)、私立中学校(やや上)に比べて弱く、「学歴・競争社会認識」や「受験回避」の志向も弱い傾向にある。

公立中高一貫校を受験させる保護者も、「学歴・競争志向」が弱く、「学歴・競争社会認識」や「受験回避」の志向は、希望校のタイプのなかでほぼ中間に位置している。

一方、公立中学校に進学させる予定の保護者は、「学歴・競争志向」や「学歴・競争社会認識」は弱い、「受験回避」の志向はやや強く持っている。

2) 保護者の「通わせたい中学校」に関する意識の構造と中学校選択

保護者全体に対して「子どもをどんな中学校に通わせたいか」を尋ねた10項目について因子分析を行い、6つの因子を抽出した(図表3-4)。因子は、それぞれ以下のように命名した。

- ・第1因子「部活動・行事充実」 …文化祭や部活動がさかんであることを志向する項目
- ・第2因子「授業・友だち関係」 …いじめがないことや、わかりやすい授業を志向する項目
- ・第3因子「地域の学校」 …家から近いことや、友だちがたくさん行くことを志向する項目
- ・第4因子「進学実績」 …いい高校や大学に入学する生徒が多いことを志向する項目
- ・第5因子「先生との関係」 …先生と気軽に話ができることや、生活面の指導を志向する項目
- ・第6因子「自由な校風」 …きまりが少ないことを志向する項目

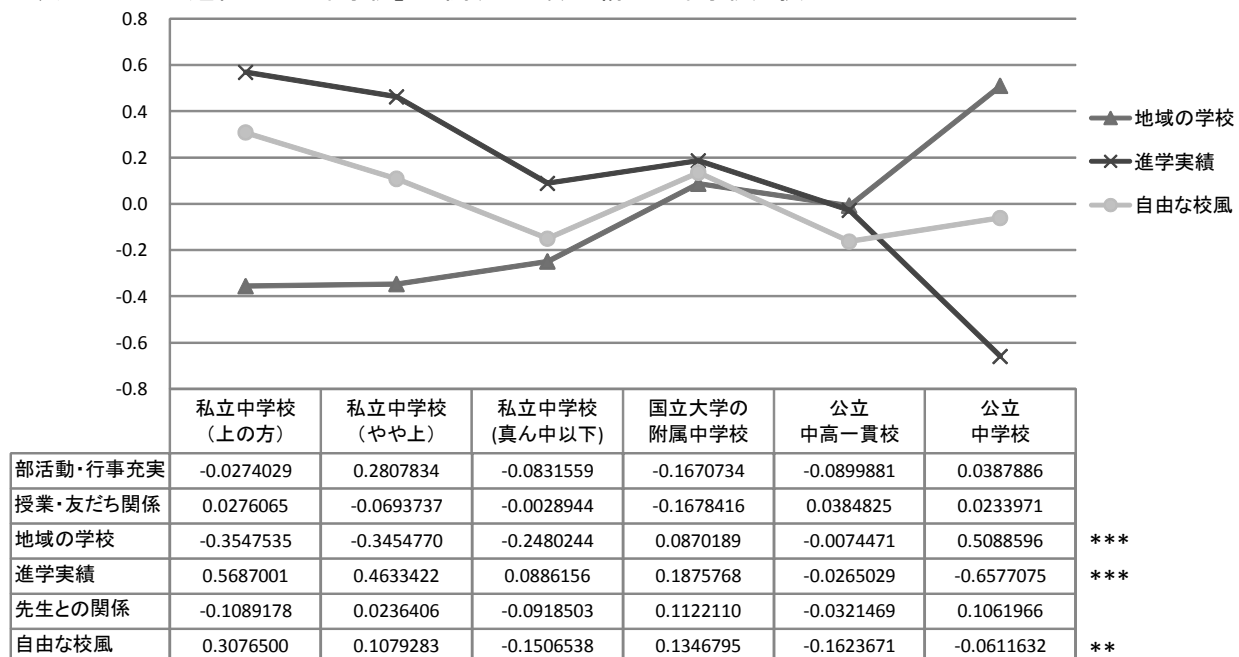
図表3-4 保護者の「通わせたい中学校」に関する意識の因子分析結果

	とても そう思う の%	成分					
		部活動・ 行事充実	授業・友だ ち関係	地域の 学校	進学実績	先生との 関係	自由な 校風
寄与率		17.945	16.674	13.383	11.640	10.992	10.027
部活動がさかん	44.4	0.906	0.167	0.044	0.018	0.046	0.061
文化祭や体育祭などの行事がさかん	37.6	0.900	0.120	-0.010	0.122	0.090	0.066
仲間はずれやいじめがない	69.7	0.093	0.878	0.031	0.016	0.093	0.040
わかりやすい授業をしてくれる	81.7	0.182	0.839	0.011	0.129	0.056	-0.006
家から近い	33.1	0.006	0.102	0.902	0.156	0.019	0.048
小学校の友だちがたくさん行く	13.0	0.039	-0.088	0.704	-0.408	0.221	-0.020
いい高校や大学に入学する生徒が多い	34.6	0.108	0.097	-0.029	0.905	0.052	0.109
先生と気軽に話ができる	34.3	0.072	0.098	0.135	0.006	0.909	0.157
悪いことをしたら厳しくしかってくれる	59.3	0.288	0.331	0.065	0.322	0.421	-0.390
きまりがなくてのびのびできる	9.3	0.144	0.059	0.044	0.134	0.145	0.895

●因子抽出法: 主成分法/回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

注) 「とてもそう思うの%」は、無回答・不明を除いて算出した。

図表3-5 「通わせたい中学校」に関する意識の構造と中学校選択



** P<.01、*** P<.001

この6因子について、希望校のタイプごとに因子得点の平均を算出したところ(図表3-5)、希望校のタイプによって有意差がみられたのは、「地域の学校」「進学実績」「自由な校風」の3因子であった。

この3因子について希望校のタイプごとにみても、私立中学校(上の方)を受験させる保護者は、「進学実績」や「自由な校風」であることを重視しており、「地域の学校」であることは重視していない。また、私立中学校(やや上)、私立中学校(真ん中以下)になるほど、「進学実績」や「自由な校風」への志向が弱まっている。

国立大学の附属中学校を受験させる保護者は、「進学実績」への志向が、私立中学校(上の方)、私立中学校(やや上)に比べて弱く、どの因子も希望校のタイプのなかでほぼ中間に位置している。

公立中高一貫校を受験させる保護者は、受験予定の保護者のなかでみると、「進学実績」や「自由な校風」への志向が最も弱く、「地域の学校」への志向は強い傾向にある。

一方、公立中学校に進学させる予定の保護者は、「地域の学校」であることを志向しており、「進学実績」への志向が弱い。

3) 保護者の志望校選択基準の構造と中学校選択

受験(検) 予定の保護者に対して「受験させる中学校を決めるとき重視すること」を尋ねた16項目について因子分析を行い、5つの因子を抽出した(図表3-6)。因子は、以下のように命名した。

- ・第1因子「授業レベル」 …有名大学への合格や授業のレベルを志向する項目
- ・第2因子「居心地・適合性」 …教育方針、いじめがないこと、学力に合うことなど、子ども自身にとってよい環境であることを志向する項目
- ・第3因子「学習面以外の充実」 …スポーツなどで有名であることや伝統を志向する項目
- ・第4因子「世間の一般的評価」 …世間での評価や制服のセンスを志向する項目
- ・第5因子「地元の公立校にない教育」 …別学、中高一貫校、個性的な教育を志向する項目

図表3-6 保護者の志望校選択基準に関する因子分析結果

	とても重視する +まあ重視する の%	成分				
		授業レベル	居心地・ 適合性	学習面以外 の充実	世間の 一般的評価	地元の公立校 にない教育
寄与率		13.075	11.953	11.714	9.657	9.608
授業のレベルが高い	88.1	0.802	0.245	0.023	0.018	-0.044
有名大学に合格する可能性が高い	72.3	0.714	-0.077	-0.018	0.073	0.200
施設や設備が充実している	86.0	0.535	0.335	0.142	0.271	0.073
その学校の教育方針や校風がよい	97.7	0.150	0.730	0.182	-0.072	0.196
いじめや非行の心配がない	82.8	-0.062	0.657	0.002	0.263	-0.048
子どもの学力に合っている	95.2	0.341	0.588	0.064	-0.042	0.133
スポーツや芸術などで有名である	38.8	-0.083	0.144	0.774	0.149	-0.077
伝統がある	61.0	0.198	0.191	0.690	0.043	0.128
大学までの一貫教育である	33.1	-0.083	-0.002	0.559	0.186	0.356
自分または配偶者の出身校である	10.1	0.320	-0.345	0.474	-0.212	0.124
制服などのセンスがよい	29.8	-0.042	-0.015	0.362	0.700	0.148
世間での評価が高い	79.0	0.490	0.171	0.048	0.622	-0.126
通学に便利な場所にある	85.0	0.261	0.343	0.057	0.351	0.148
男子だけ(女子だけ)の教育である	21.5	0.019	0.001	0.176	0.150	0.720
公立校にはできない個性的な教育が期待できる	83.2	0.149	0.306	0.129	-0.162	0.640
中高一貫教育である	88.1	0.151	0.076	-0.134	0.487	0.529

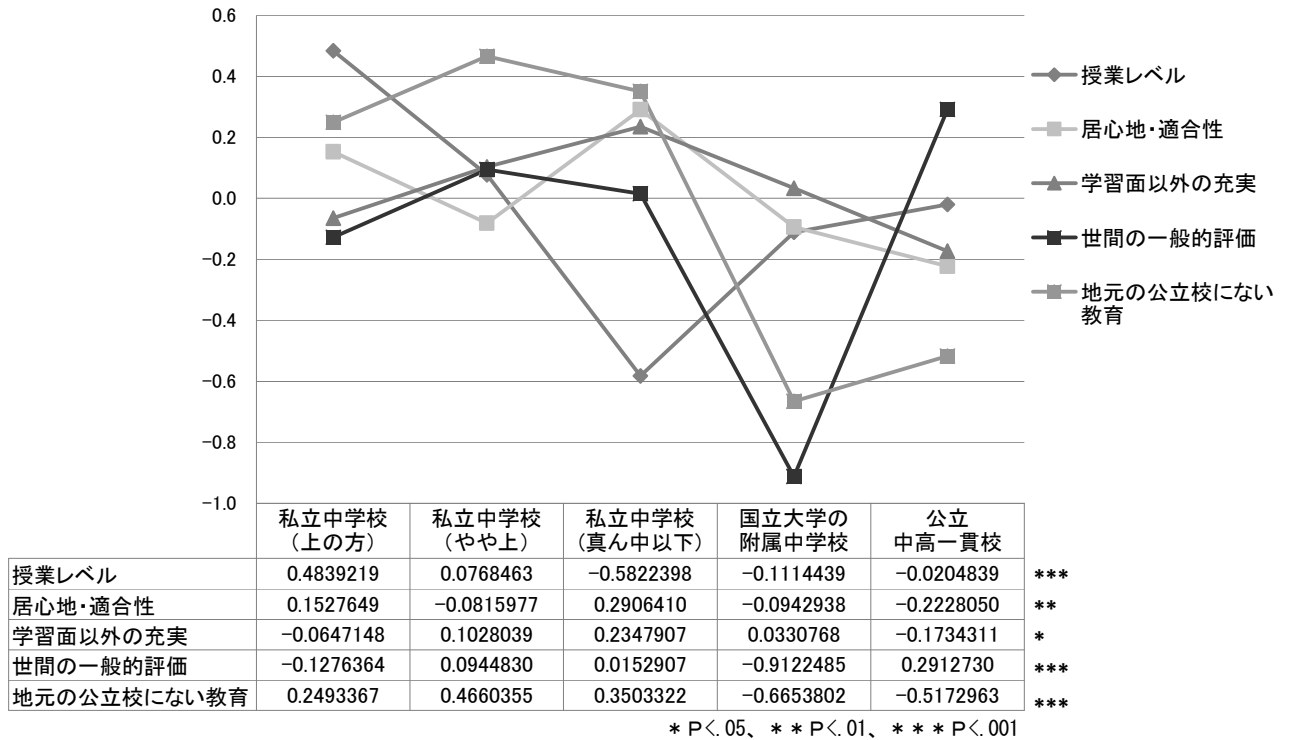
●因子抽出法: 主成分法/回転法: Kaiser の正規化を伴うバリカッ法

注) 「とても重視する+まあ重視するの%」は、無回答・不明を除いて算出した。

この5因子について、希望校のタイプごとに因子得点の平均を算出したところ(図表3-7)、5因子すべてにおいて、希望校のタイプによる有意差がみられた。また図表3-8は、図表3-7を簡略化し、因子得点の平均が+か-かを示したものである。

5因子について希望校のタイプごとにみても、私立中学校(上の方)を受験させる保護者は、「授業レベル」を重視しているほか、「地元の公立校にない教育」であることや「居心地・適合性」も重視する傾向がある。私立中学校(やや上)、私立中学校(真ん中以下)になるほど、「授業レベル」への

図表 3-7 保護者の志望校選択基準の構造と中学校選択



図表 3-8 保護者の志望校選択基準の構造と中学校選択 (+, -)

	私立中学校 (上の方)	私立中学校 (やや上)	私立中学校 (真ん中以下)	国立大学の 附属中学校	公立 中高一貫校
授業レベル・進学実績	++	+	--	-	-
居心地・適合性	+	-	+	-	-
学習面以外の充実	-	+	+	+	-
世間の一般的評価	-	+	+	--	+
地元の公立校にない教育	+	++	+	--	--

注) 図表 3-7 で算出した因子得点の平均を+か-かで示した。0.4以上の場合には++、-0.4以下の場合には--と示した。

志向が弱まり、私立中学校（やや上）や私立中学校（真ん中以下）を受験させる保護者は、「地元の公立校にない教育」の方を重視している。また、私立中学校（真ん中以下）を受験させる保護者は、さらに、「居心地・適合性」や「学習面以外の充実」も重視している。

国立大学の附属中学校を受験させる保護者は、私立中学校（上の方）を受験させる保護者ほど、「授業レベル」や「居心地・適合性」を重視しておらず、私立中学校（真ん中以下）ほど「学習面の充実」を志向しているわけでもない。

一方、公立中高一貫校を受験させる保護者は、「世間の一般的な評価」を最も重視しており、「授業レベル」も私立中学校（やや上）に次いで志向しているが、その他の因子はあまり重視していない。

4) 子どもの「通いたい中学校」に関する意識の構造と中学校選択

子ども全体に対して「どんな中学校に通いたいか」を尋ねた10項目について因子分析を行い、5つの因子を抽出した(図表 3-9)。因子は、それぞれ以下のように命名した。保護者の「通わせたい中学校」の分析において抽出された因子と類似する因子が抽出された。

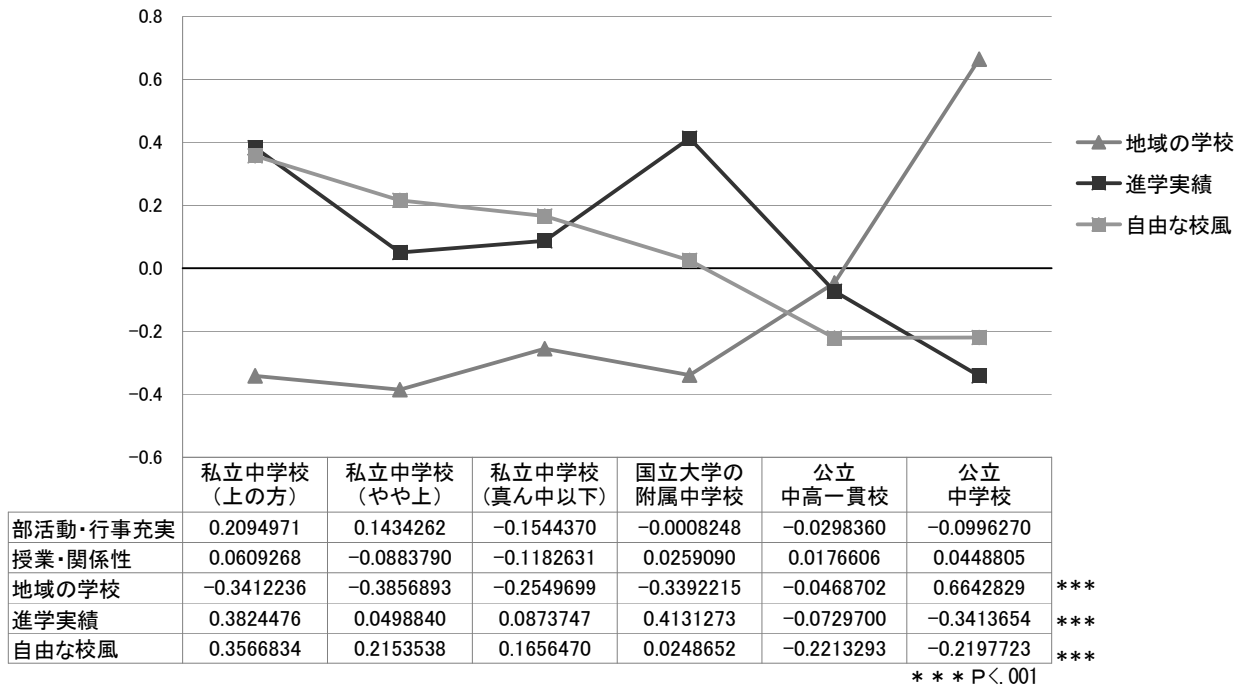
- ・第1因子「部活動・行事充実」…文化祭や部活動がさかんであることを志向する項目
- ・第2因子「授業・関係性」…いじめがないことや先生との関係、わかりやすい授業を志向する項目
- ・第3因子「地域の学校」…家から近いことや、友だちがたくさん行くことを志向する項目
- ・第4因子「進学実績」…いい高校や大学に入学する生徒が多いことを志向する項目
- ・第5因子「自由な校風」…きまりが少ないことを志向する項目

図表3-9 子どもの「通いたい中学校」に関する意識の因子分析結果

	とても そう思う の%	成分				
		部活動・ 行事充実	授業・ 関係性	地域の 学校	進学実績	自由な 校風
寄与率		18.260	17.685	15.513	11.803	11.117
部活動がさかん	59.3	0.880	0.086	0.013	0.084	0.008
文化祭や体育祭などの行事がさかん	62.3	0.846	0.189	-0.040	0.149	0.127
仲間はずれやいじめがない	76.8	0.002	0.821	0.016	0.103	-0.140
分かりやすい授業をしてくれる	81.8	0.172	0.769	-0.094	0.195	0.059
先生と気軽に話ができる	54.2	0.243	0.621	0.357	-0.108	0.137
小学校の友だちがたくさん行く	32.2	0.103	0.054	0.829	-0.207	-0.074
家から近い	42.9	-0.182	0.005	0.798	0.237	0.267
いい高校や大学に入学する生徒が多い	44.9	0.160	0.140	-0.062	0.883	0.041
きまりが少なくてのびのびできる	37.9	0.265	0.075	0.219	0.123	0.813
悪いことをしたら厳しくしてくれる	27.9	0.328	0.217	0.192	0.444	-0.560

●因子抽出法：主成分法／回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法
注) 「とてもそう思うの%」は、無回答・不明を除いて算出した。

図表3-10 子どもの「通いたい中学校」に関する意識の構造と中学校選択



この5因子について、希望校のタイプごとに因子得点の平均を算出したところ(図表3-10)、希望校のタイプによって有意差がみられたのは、「地域の学校」「進学実績」「自由な校風」の3因子であった。

この3因子について希望校のタイプごとにみても、私立中学校(上の方)を受験する子どもは、「進学実績」や「自由な校風」であることを重視しており、「地域の学校」であることは重視していない。また、私立中学校(やや上)、私立中学校(真ん中以下)になるほど、「進学実績」や「自由な校風」への志向は弱まっている。

国立大学の附属中学校を受験する子どもは、「進学実績」への志向が強く、「地域の学校」であることは志向していない。

一方、公立中高一貫校を受験する子どもは、「進学実績」や「自由な校風」への志向が、他の受験予定の子どもに比べて弱く、「地域の学校」であることは受験予定の子どもなかで最も重視している。

公立中学校に進学する予定の子どもは、「地域の学校」であることを志向しており、「進学実績」や「自由な校風」であることは志向していない。

5) 子どもの志望校選択基準の構造と中学校選択

受験（検）予定の子どもに対して「受験しようと思うのはどんな中学校か」を尋ねた10項目について因子分析を行い、4つの因子を抽出した(図表3-11)。因子は、それぞれ以下のように命名した。保護者の志望校選択基準とは質問項目が異なるが、「授業レベル・進学実績」「学習面以外の充実」など、類似する因子も抽出された。

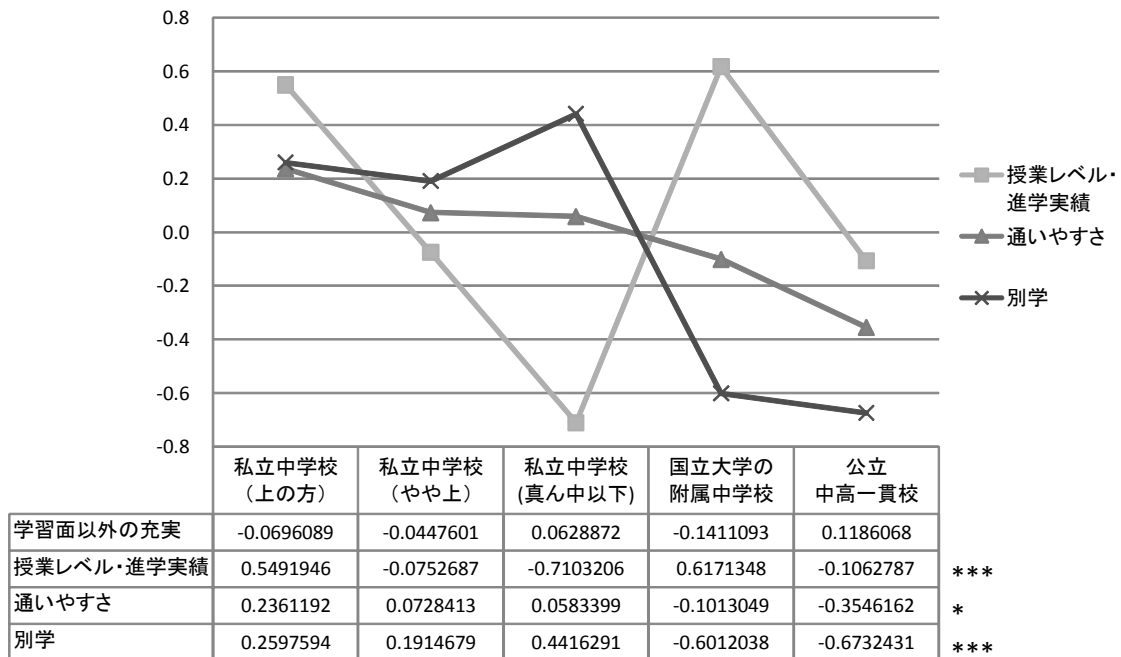
- ・第1因子「学習面以外の充実」 …スポーツ、部活動、服装、いじめがないことなど、学習面以外のことを志向する項目
- ・第2因子「授業レベル・進学実績」 …授業レベルや、有名大学合格者が多いことを志向する項目
- ・第3因子「通いやすさ」 …家から近いことや、規則が厳しくないことを志向する項目
- ・第4因子「別学」 …男女別々の学校であることを志向する項目

図表3-11 子どもの志望校選択基準の因子分析結果

	とてもそう+わりとそうの%	成分			
		学習面以外の充実	授業レベル・進学実績	通いやすさ	別学
寄与率		19.833	18.354	13.306	12.263
スポーツや芸術などで有名な中学校	54.6	0.832	0.106	0.053	-0.038
部活動がさかんな中学校	75.4	0.780	0.124	0.200	-0.063
制服のすてきな(かっこいい)中学校	52.9	0.607	-0.076	-0.100	0.498
いじめの心配がない中学校	81.8	0.409	0.339	0.206	0.317
授業のレベルが高い中学校	81.7	0.084	0.783	-0.163	-0.203
有名な大学に合格する人が多い中学校	72.4	-0.051	0.770	0.044	0.244
みんなの評判のよい中学校	88.1	0.330	0.685	0.262	0.018
規則が厳しくない中学校	50.3	0.166	0.094	0.755	-0.148
家から近い中学校	42.8	0.027	-0.042	0.750	0.255
男女別々の中学校	36.4	-0.030	0.053	0.071	0.827

●因子抽出法：主成分法/回転法：Kaiser の正規化を伴うバリダックス法
注) 「とてもそう+わりとそうの%」は、無回答・不明を除いて算出した。

図表3-12 子どもの志望校選択基準の構造と中学校選択



* P<.05, *** P<.001

この4因子について、希望校のタイプごとに因子得点の平均を算出したところ(図表3-12)、希望校のタイプによって有意差がみられたのは、「授業レベル・進学実績」「通いやすさ」「別学」の3因子であった。

この3因子について希望校のタイプごとにみても、私立中学校（上の方）を受験する子どもは、「授業レベル・進学実績」を重視しており、「通いやすさ」や「別学」であることも重視する傾向にある。私立中学校（やや上）、私立中学校（真ん中以下）になるほど、「授業レベル・進学実績」への志向は弱まり、また私立中学校（真ん中以下）を受験する子どもは、「別学」であることを重視している。

国立大学の附属中学校を受験する子どもは、私立中学校（上の方）を受験する子どもと同程度、「授業レベル・進学実績」を重視しているが、「通いやすさ」は重視していない。

一方、公立中高一貫校を受験する子どもは、「授業レベル・進学実績」への志向は私立中学校（やや上）の子どもと同程度であり、「通いやすさ」は最も重視していない。

(3) まとめ

私立中学校（上の方）や私立中学校（やや上）を受験させる保護者は、「学歴・競争志向」が強く、受験を回避させようという思いが弱い。進学実績を重視し、高いレベル授業を求めている。しかし、自由な校風であることも重視している。こうした傾向は、子どもも同様である。

これに対して、同じ私立中学校でも真ん中以下の学校を受験させる保護者は、「学歴・競争志向」は弱い、「学歴・競争社会認識」は持っており、大変な受験競争から子どもを回避させたいと考えているようである。進学実績や高いレベルの授業はそれほど求めていないが、スポーツ・芸術などの特徴や伝統などの学習以外の面を重視している。子どもも授業レベルの高さは求めていないが、男女別学などの特徴を重視する傾向がみられる。進学実績以外でも、そうした公立中学校にない特徴に魅力を感じる場合、学力レベルは高くなくても私立中学校に進学させよう、しようとするようだ。

一方、公立中学校に進学させようと考えている保護者は、学歴獲得のために競争させようという意識がもっとも弱く、家から近いという条件を重視している。子どもも同様である。

国立大学の附属中学校や公立中高一貫校を受験（検）させる予定の保護者は、私立中学校を希望する保護者と公立中学校に進学させる保護者の中間に位置する。公立中学校を選択する保護者ほど進学実績を重視しないわけではないが、その思いは私立中学校を希望する保護者ほど強くない。

多様な価値観をそれぞれ引き受ける学校が存在するようになったことで、地域の学校との切断や、子どもどうし、保護者間の分断が進行していることが考えられる。

図表3-13 保護者の教育期待・子どもの価値意識に関する因子得点のまとめ（+、-）

対象	因子	私立中学校 (上の方)	私立中学校 (やや上)	私立中学校 (真ん中以 下)	国立大学の 附属中学校	公立 中高一貫校	公立中学校
保護者	学歴・競争志向	++	+				--
保護者	進学実績	++	++				--
子ども		+			++		-
子ども	授業レベル・進学実績	++		--	++		
保護者	授業レベル	++		--			
保護者	地元の公立校にない教育	+	++	+	--	--	
子ども	自由な校風	+	+			-	-
保護者		+					
子ども	別学	+		++	--	--	
子ども	通いやすさ	+				-	
保護者	学歴・競争社会認識		+	+			-
保護者	居心地・適合性			+		-	
保護者	学習面以外の充実			+			
保護者	世間の一般的評価				--	+	
保護者	受験回避	-					
保護者	地域の学校	-	-	-			++
子ども		-	-	-	-		++

注) 分析に用いた因子のうち、希望校のタイプによって有意差がみられた因子について、因子得点の平均を+、-で示したもの。

0.4 以上の場合は++、-0.4 以下の場合は--と示した。

(橋本尚美)

第4節 社会属性別にみた中学受験の変化—88年調査と07年調査の比較から

ここでは、東京23区内で行った88年調査と07年調査のデータを用いて、2時点で中学受験をする層がどのように変化したのかを検討する。

(1) 東京における中学校選択の環境変化

88年調査の当時はバブル好景気の絶頂期であったが、教育においては「学校の荒れ」や「受験競争の過熱」が社会問題になっていた。校内暴力事件やいじめ、不登校など増加は、一部の子どもや保護者が公立学校に「恐れ」や「不信」を抱く原因になっていたと考えられる。また、当時は団塊ジュニア世代が大学入試を迎える時期にあたっており、大学志願者の4割弱が大学に入学できなかった。こうした状況は、大学進学に有利な中高一貫校や大学までの一貫校の受験を促進する要因になっていたと考えられる(資料1)。

とはいえ、88年の首都圏の中学受験率は9.8%(図表4-1)、東京都の私立中学に通う生徒比率は13.6%(図表4-2)であり、中学受験がさかんな23区内に限っても、受験率は2割程度であったと推察される。中学受験は広がりつつあったが、それでも多くは地元の公立中学校に進学した時代であった。

これに対して、07年調査を行った今日は、3つの点で状況が大きく異なる。第一は、私立中学受験の拡大だ。07年の首都圏の中学受験率は18.9%、東京都の私立中学校の生徒比率は26.3%であり、88年と比べるといずれも2倍である。東京都に限ると、3~4割の子どもが中学受験をしていることになる。第二に、公立中高一貫校の設置があげられる(資料2)。現在、都内の公立中高一貫校は7校であるが、平均の倍率は10倍に迫る。各校の募集定員を乗じると9,000名程度が受検した計算になるが、これは東京都の小6生の1割弱に相当する。第三に、学校選択制の広がりがある。この制度を導入しているのは23区中19区であり、公立中学校に進学する場合でもおよそ8割が選択の機会をもっていることになる(図表4-3)。

これまで、1988年当時の教育動向と、東京における中学校選択の状況について述べてきた。1988年のころも「私学ブーム」と呼ばれていたが、今日ほどに中学受験が一般的な状況ではなかった。あまり深く考えずに地元の公立中学校に進むというのが、多くの小学生・保護者にとっての進路選択のパターンであったと考えられる。しかし、今日では、3割程度は私立中学校を、1割程度は公立中高一貫校を受験(検)する。また、受験しない場合でも、学校選択制を導入している自治体が多く、公立中学校を選択できるケースは多い。07年調査では、学校選択制が「導入されていない」もしくは「わからない」と回答し、かつ中学受験をさせようと考えたことが「なかった」と回答した保護者は、全体の10.6%だけであった。もはや、当たり前のように地元の公立中学校に進学するケースは、東京都では少数だといってもよいだろう。

以下では、こうした環境の変化が、子どもや保護者にどのような影響を与えたのかについて確認する。

資料1 中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」1991年

第II部 後期中等教育の改革とこれに関連する高等教育の課題

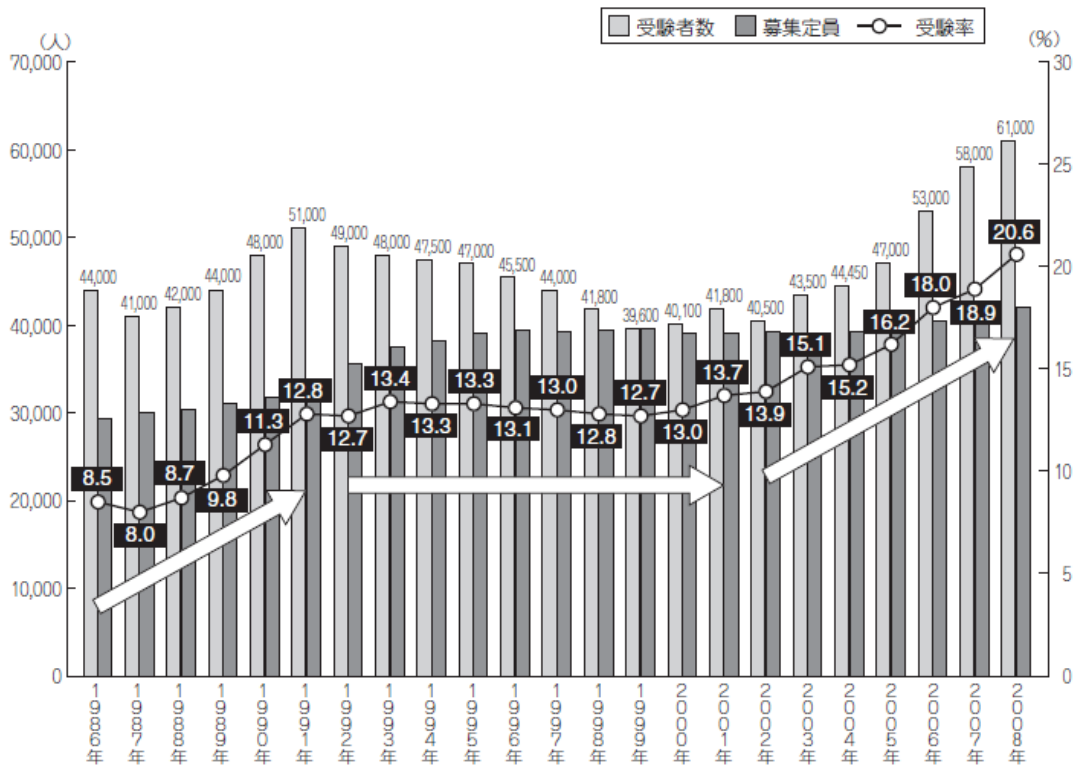
第1節 受験競争激化の問題点

(1) 競争の低年齢化

動機はいろいろで、高校入試や大学入試のない、のびのびした中高一貫教育を受けたいとか、荒れた学校には行きたくないとか、偏差値に強く依存した進路指導を回避したいとか、これら多様な動機から、学校選択の自由がある大都市圏では、小学生の中学校への受験競争が年ごとに激しくなっている。言うまでもなくその動機の中には、早い段階で一定のコースに乗らないと有力大学への進学が不利になるという恐れが含まれている。

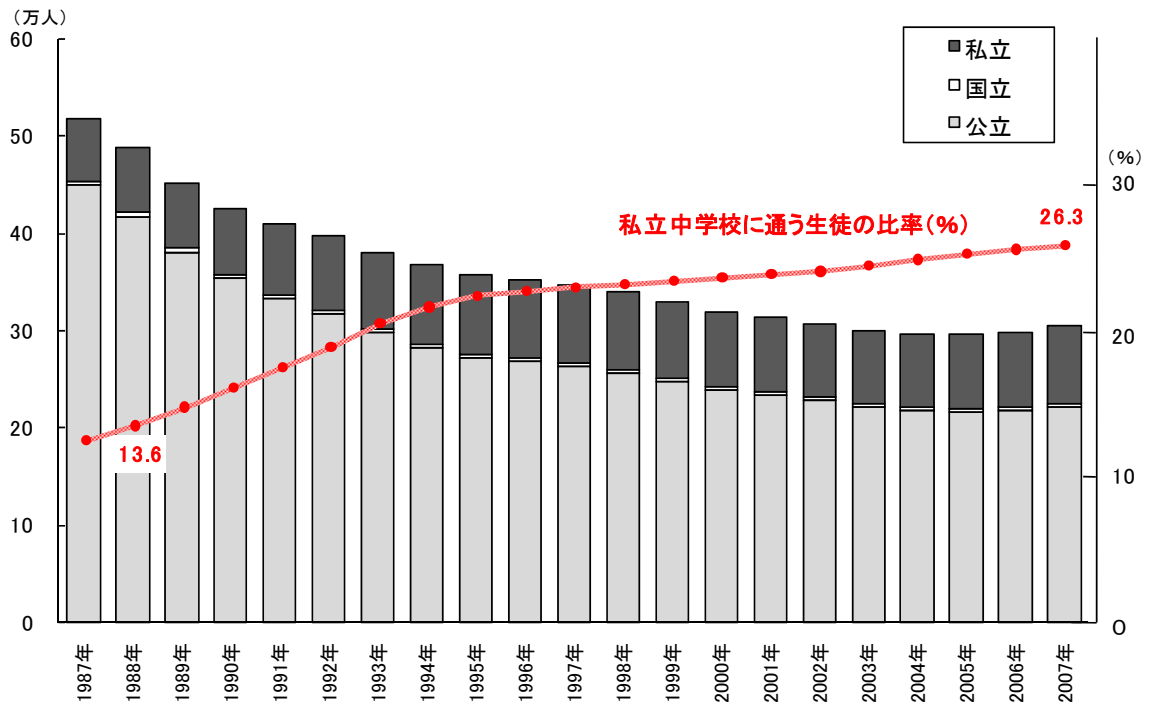
小学生の受験競争は、許容範囲を超えた出題内容も含めて、人間の順調な成長の速度に逆らい、成人後の精神の活力や独創性を脅かす可能性が高い。また、知的発達の高い子どもを余りに幼いうちから選(え)り分けることは、その他の子ども社会に好ましからぬ作用を及ぼし、国民教育の全体にも歪みを与える。すなわち子どもを早期から焦りと損得の感情に追い込む教育は、長い目で見て日本の未来を危うくするであろう。小学生が夜10時過ぎに塾から帰って来る光景は、いかにも異常である。最初は東京だけと理解されていたこの傾向が、地方都市に少しずつ着実に増加していることは、極めて危険な兆候と言える。

図表4-1 中学受験率の推移（首都圏）



注：日能研による推計

図表4-2 中学校の生徒数の推移（東京都）



注1：文部科学省「学校基本調査」より作成した。

注2：生徒数は在学者であり、近隣県などの流入出は考慮されていない。

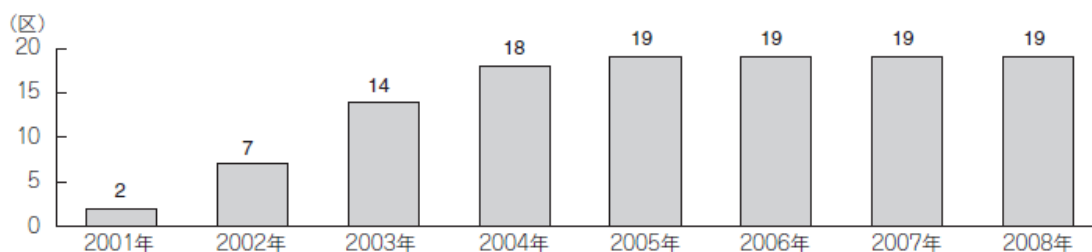
資料2 東京都の公立中高一貫校

設置年	学校名	定員	実質倍率
2005年	都立白鷗高等学校附属中学校（併設型）	160名	7.65倍
2006年	都立両国高等学校附属中学校（併設型）	120名	6.36倍
2006年	都立桜修館中等教育学校（中等教育学校）	160名	6.51倍
2006年	都立小石川中等教育学校（中等教育学校）	160名	7.27倍
2006年	千代田区立九段中等教育学校（中等教育学校）	160名	9.68倍
2008年	都立武蔵高等学校附属中学校（併設型）	120名	14.81倍
2008年	都立立川国際中等教育学校（中等教育学校）	160名	14.02倍
2010年（予定）	中野地区中高一貫6年制学校（併設型）	120名	
2010年（予定）	練馬地区中高一貫6年制学校（併設型）	120名	
2010年（予定）	八王子地区中高一貫6年制学校（中等教育学校）	160名	
2010年（予定）	三鷹地区中高一貫6年制学校（中等教育学校）	160名	

注1：適性検査のある併設型中高一貫校、中等教育学校のみを示し、適性検査のない連携型中高一貫校は除いた。

注2：実質倍率は一般枠（九段中等教育学校は区民外枠）の数値を示した。

図表4-3 学校選択制導入自治体数の推移（東京23区）



注：東京都教育委員会による報道発表資料より作成した。

（2）分析の方法

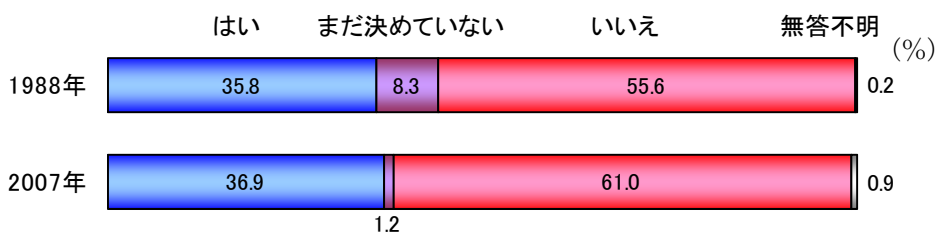
88年調査と07年調査では調査方法が異なっており、変化を厳密にとらえることは難しい。

88年調査は、中学受験をする子ども・させる保護者の意識や行動の特性を明らかにすることを目的に実施した。そのため、中学受験がさかんと思われる地域の学校に協力を依頼して調査を行っている。図表4-4に中学受験の予定を示したが、「はい」（＝受験する予定）は35.8%である。図表4-2に示したように、1988年の東京都の私立中学校の在学者数は13.6%であるから、受験率は2割に満たない程度であったと推測できる。この点を考慮すると、88年調査の受験予定率は明らかに高い。また、実施時期は10～11月であり、07年調査よりも少しだけ早い。88年調査で「まだ決めていない」が多いのは、実施時期の違いが影響を与えている可能性がある。

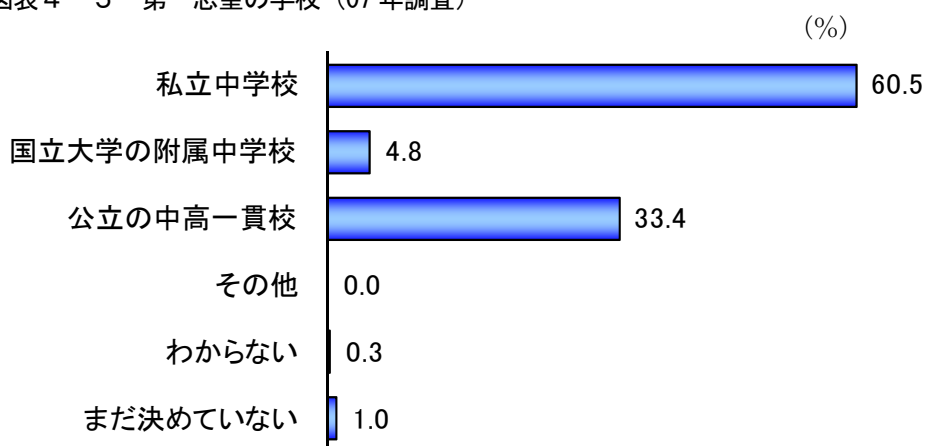
一方、07年調査は中学受験だけでなく、公立中学校の学校選択制を含めた選択全体の実態について明らかにすることを目的に実施した。調査は郵送法により行い、回収率は39.0%であった。実施時期は12月である。中学受験（検）を予定していることを示す「はい」の比率は、36.9%であった。先に述べたように、現在の東京都における中学受験率は4割程度と推定されるので、ほぼ実態に近い回収ができていられると思われる。ただし、07年調査の受験（検）には、88年調査と異なり、公立中高一貫校の受験希望が含まれている。ちなみに、受験（検）する場合の第一希望は、図表4-5のような結果になった。

経年での変化をとらえるにあたっては、以上のような調査手法の違いやサンプルの特性を考慮する必要がある。とくに、1988年調査ではやや熱心な家庭の子ども・保護者が多いと推察できる。そこで今回の分析では、中学受験（検）をする予定しているケース（中学受験予定者）のみを取り出して比較をしたり、属性ごとの受験予定率を比に換算したりといった操作を行い、変化をとらえることにする。

図表 4-4 中学受験の予定



図表 4-5 第一志望の学校 (07年調査)



注：数値は、子どもに中学受験をさせる保護者（314名）の回答。無回答は除外した。

(3) 主な結果

それでは、主な結果を確認していこう。

現在では、中学受験（検）において塾での学習が欠かせなくなっている状況がある。最初に、塾の利用などについて、88年と07年で違いがあるのかをみてみよう。

1) 塾の影響の拡大

図表 4-6 に示すように中学受験を予定している子の通塾率は、88年 87.3%、07年 87.8%であり、9割が通塾するという状況は変化していない。さらに、「行っている」「前に行っていたが、今は行っていない」と回答した子どもに対して「どのような塾に通っているか」をたずねたところ、88年も07年も8～9割が「進学塾」と回答している（図表 4-7）。中学受験のために塾（とくに中学受験に対応した進学塾）に行く必要性は、それほど大きく変わっていない印象を受ける。ただし、2007年のデータで第一志望別に通塾率をみると、「私立・国立中学校」を第一志望にしている子は 93.6%であるのに対して、「公立中高一貫校」を第一志望にしている子は 78.1%と若干低い。

このように受験予定者の通塾率は大きく変わっていないが、その影響力は拡大しているようだ。

図表 4-8 は1週間当たりの通塾回数を示している。これをみると、88年当時は「3回」「4回」に回答が集中しており、3人に2人が選択している。ところが、07年全体の数値は分散が大きくなっており、「1回」「2回」といった少ない回数も 25%程度いるが、「5回」「6回」「7回」といった多い回数も 32%いるといった分布になった。分散が大きくなった原因は、「私立・国立中学校」を第一志望にする子の頻度が高いのに対して、「公立中高一貫校」を第一志望にする子の頻度が低いためである。ちなみに、88年当時は全員が私立・国立中学校を第一志望にしていたと想定して07年調査の「私立・国立中学校」志望者と比べると、週に「5回」以上塾に通っている子どもは、88年調査 19.5%から07年調査 43.3%と大幅に増えた。現在の東京では、私立・国立中学校を受験するためには、少なくとも週に半分程度は塾に通わなければならないことがわかる。その反面で、公立中高一貫校ができたこと

によって、それほどたくさん塾に通わなくても受験するという新しい中学受験のスタイルも生まれている。

次に、塾1回当たりの学習時間（図表4-9）を確認しよう。この質問項目は、88年調査と07年調査で選択肢が異なるために単純な比較ができない。ただし、88年調査の「4時間以上」と07年調査の「4時間より多い」を比べると、07年調査のほうが明らかに塾で長時間勉強する子どもが多くなっていることがわかる。とくに、07年調査の「私立・国立中学校」希望者は、「4時間より多い」という回答が3割を超え、最頻値である。私立・国立中学校は、受験率の上昇によって、難関校を中心に競争が激しくなっていると推察できる。このため、塾でより多く学習をしなければならない状況が生まれているようだ。

それでは、保護者は塾にどれくらい依存しているのだろうか。その点を検討するために、受験に関する情報を集めるうえでどのような情報源をたよりにしているかをたずねた結果をみてみよう。図表4-10からは、「たよりにしている」という回答がもっとも多いのが「学習塾の先生」であることがわかる。しかも、「とてもたよりにしている」という回答は、48.2%から64.2%と16ポイント上昇した。同様に、「子どもと同じ学校の保護者」が増加する一方で、「夫」や「小学校の先生」が減少している。一般的な教育に関する情報ではなく、こと受験にかかわる情報ということになると、専門家である塾や、受験情報を集めている保護者の口コミが重要になっているのだろう。単に子どもの学習に与える影響だけでなく、保護者の情報収集という点でも、塾は大きな影響を与えるようになっている。

図表4-6 通塾率 (%)

	1988年	2007年		
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
行っている	87.3	87.8	93.6	78.1
前に行っていたが、今は行っていない	7.2	4.5	3.0	5.7
一度も行っていない	5.5	7.7	3.5	16.2
度数	291	311	202	105

1988年と2007年の差 $p=.220$ 、2007年の私立・国立中学校と公立中高一貫校の差 $p=.000$

注：無回答は除外した。2007年志望校別の「その他」の志望者は表から省略した。（図表3-7～9も同様）

図表4-7 塾の種類 (%)

	1988年	2007年		
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
学校の勉強がわかるようになるための補習塾	12.9	8.8	5.6	15.1
私立や国立などの中学校を受験するための進学塾	84.5	89.1	93.8	79.1
その他	2.6	2.1	0.5	5.8
度数	271	284	194	86

1988年と2007年の差 $p=.268$ 、2007年の私立・国立中学校と公立中高一貫校の差 $p=.000$

図表4-8 通塾回数 (%)

	1988年	2007年		
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
1回	3.6	10.5	4.6	23.9
2回	11.6	15.4	7.2	33.0
3回	27.8	14.0	11.3	18.2
4回	37.5	28.0	33.5	17.0
5回	11.2	17.1	22.7	4.5
6回	5.4	10.8	14.9	2.3
7回以上	2.9	4.2	5.7	1.1
度数	277	286	194	88

1988年と2007年の差 $p=.000$ 、2007年の私立・国立中学校と公立中高一貫校の差 $p=.000$

注：通塾回数は、88年調査では親が、07年調査では子どもが回答しているため、単純な比較はできない。

図表4-9 塾1回当たりの時間

(%)

	1988年	2007年		
		全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
1時間未満	0.7			
1～2時間未満	16.9			
2～3時間未満	41.0			
3～4時間未満	32.0			
4時間以上	9.4			
度数	278			
1時間		2.8	1.0	5.7
1時間30分		13.7	7.3	28.4
2時間		13.3	7.3	26.1
2時間30分		8.8	7.3	12.5
3時間		11.9	10.9	13.6
3時間30分		9.1	11.9	3.4
4時間		17.2	23.3	3.4
4時間より多い		23.2	31.1	6.8
度数		285	193	88

私立・国立中学校と公立中高一貫校の差 p=0.00

注：88年調査と07年調査では選択肢の形式が異なるため、単純な比較はできない。

図表4-10 受験で頼りにしている情報源（私立・国立中学校希望者）（%）

		1988年	2007年	
小学校の先生	とてもたよりにしている	8.3	3.9	p=0.00
	まあたよりにしている	28.8	6.9	
学習塾の先生	とてもたよりにしている	48.2	64.2	p=0.006
	まあたよりにしている	41.4	29.4	
子どもと同じ学校の保護者	とてもたよりにしている	3.9	7.8	p=0.00
	まあたよりにしている	24.6	44.6	
(学校以外の)友人・知人	とてもたよりにしている	6.8	8.3	p=0.192
	まあたよりにしている	35.5	40.7	
親類	とてもたよりにしている	1.1	0.5	p=0.638
	まあたよりにしている	15.1	13.9	
夫	とてもたよりにしている	25.7	20.0	p=0.00
	まあたよりにしている	40.0	29.2	
受験情報雑誌	とてもたよりにしている	18.7	16.7	p=0.536
	まあたよりにしている	51.4	57.6	

注1：「あまりたよりにしていない」「まったくたよりにしていない」は表から省略した。また、無回答は除外した。

注2：88年調査は全体の数値、07年調査は私立・国立希望者の数値を示した。

注3：「夫」については母親の回答のみを分析の対象にした。

2) 教育費の増大

それでは、教育費はどのように変化しているのだろうか。図表4-11は、中学受験（検）をする子どもに限って、1人にかかる月あたりの教育費を示した。88年調査でもっとも多かった「3万円台」が07年調査では大きく減り、代わって「5万円台」を超える支出が増えていることがわかる。「2万円台」以下の数値もわずかに増えて分散が大きくなっているが、全体では中学受験（検）に対してより高額な教育費をかける家庭が増えている。

図表4-11 学校外の教育費（月あたり・1人）（%）

	1988年	2007年		
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
1万円未満	1.1	1.5	0.6	2.3
1万円台	1.8	6.0	2.3	13.6
2万円台	8.2	9.4	5.1	18.2
3万円台	21.5	9.7	6.2	17.0
4万円台	16.1	11.6	9.0	17.0
5万円台	15.1	17.2	20.3	10.2
6万円台	9.0	13.1	15.3	9.1
7万円台	3.9	6.4	6.8	5.7
8万円台	7.9	7.1	10.2	1.1
9万円台	2.5	1.9	2.8	0.0
10万円以上	12.9	16.1	21.5	5.7

1988年と2007年の差 p=0.004、2007年の私立・国立中学校と公立中高一貫校の差 p=0.00

注1：受験をさせる予定の保護者の回答。無回答は除外した。

注2：2007年志望校別の「その他」の志望者は表から省略した。

ただし、ここでも「私立・国立中学校」志望者と「公立中高一貫校」志望者とで傾向が異なる。07年調査の結果を第一志望別にみると、「私立・国立中学校」志望に「5万円台」を超える高額支出が多いのに対して、「公立中高一貫校」志望の家庭は「1万円台」から「4万円台」程度の支出が多い。これは図表4-8（通塾回数）と同様の分布であり、両者は関連している（サンプル全体の通塾回数と教育費の相関係数は、「.394」（ $p=.000$ ）であった）。私立・国立中学校志望でも「3万円台」以下が14.2%いて、教育費が比較的少ない層が完全に排除されているわけではない。しかし、88年当時と比べると、より高額な投資が必要になっている様子が表れている。

3) 暮らし向き「中・下位」の受験が拡大

それでは、中学受験（検）は経済的に豊かな家庭だけで行われているのだろうか。本調査では07年でのみ世帯年収をたずねているが、88年調査ではたずねていない。このため、受験（検）させる家庭における年収の変化を確認することができない。そこで、自己評価による家庭の暮らし向きを聞いた変数を用いて、どのような家庭で中学受験（検）が行われているかを見てみよう。ちなみに、2007年調査では、世帯年収と暮らし向きの相関係数は「.571」であり、一定の目安にはなるものとする。

図表4-12は、暮らし向きごとに中学受験（検）の予定率を示した。全体の数値を見ると、88年に比べて07年は「中」層や「下」層で予定率が高いことがわかる。しかし、先に述べたように88年調査と07年調査では調査母体が異なるため、単純な受験率の比較はできない。そこで、暮らし向き「上」を基準としたときに、「中」「下」ではどれくらいの確率で受験（検）をするかを比で表した。

ここからは、次のようなことがわかる。

①第一に、88年も07年も暮らし向きと受験予定には関連が見られる。暮らし向き「上」の保護者が受験（検）させる予定を「1」とすると、「下」の保護者が受験（検）させる確率は、いずれの時点でも「0.4」前後で半分に満たない。経済的に豊かな家庭で中学受験（検）をさせる傾向は、大きく変わっていない。

②しかし、第二に、88年と07年を比べると、「中」は0.56から0.62に、「下」は0.37から0.42に上昇しており、「中」「下」ともに受験の確率が高まっていることが読み取れる。中学受験（検）が経済的に豊かとはいえない層にも拡大している。

③第三に、07年調査からは、公立中高一貫校は暮らし向きと受験予定の関連が弱いことがわかる。「中」層や「下」層の受験（検）の増加は、公立中高一貫校の影響によるところが大きい。

④これに対して、第四に、私立・国立中学校の志望者は、「上」と「下」の差が大きい。「上」層が受験する確率を「1」とすると、「中」層で半分程度（0.53）、「下」層で3割（0.30）である。私立・国立中学校の受験に限定すると、88年調査と比べて差が拡大しており、経済的な要因の影響は強まっていると見ることができる。

図表4-12 受験予定率／比（暮らし向き別）

	●受験予定率 (%)				●比（「上」を1とした）			
	1988年	2007年			1988年	2007年		
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
上	54.5	55.9	41.2	14.7	1.00	1.00	1.00	1.00
中	30.3	34.6	22.0	12.6	0.56	0.62	0.53	0.86
下	20.2	23.3	12.2	11.1	0.37	0.42	0.30	0.76

注1：暮らし向きについて、「上」「中の上」の回答を「上」、「中の中」を「中」、「中の下」「下」を「下」として示した。
 注2：受験予定率の全体は、「受験させる予定か」という質問に「はい」と回答した比率を示した（「まだ決めていない」「いいえ」は図表から省略した）。また、無回答・不明は分析から除外した。（以下、同様）

4) 親の学歴の規定力は大きな変化なし

(1) 母親の学歴の規定力

次に、保護者の学歴と中学受験（検）の関係を見てみよう。

図表4-13では、母親の学歴ごとに中学受験（検）をさせる比率を示した。さらには、「高等学校」を卒業した母親を「1」としたときの、「短期大学・専門学校」卒、「大学・大学院」卒の比もあわせて表した。

ここからは、以下のようなことが読み取れる。

①第一に、母親の学歴が高いほど中学受験（検）を予定しており、大きな傾向は88年も07年も変わらない。「高等学校」卒（以下、高卒層）を「1」としたとき、「大学・大学院」卒（以下、大卒層）が受験（検）させる確率は、88年調査も07年調査も2倍を超える。

②しかし、第二に、88年と07年を比べると、大卒層は2.24から2.65になった。高卒層と大卒層の差は拡大しており、高学歴層に機会が開かれる（もしくは、学歴の低い層に機会が狭まる）ような変化が進んだ可能性がある。

③第三に、07年調査の第一志望別の数値に着目すると、公立中高一貫校の志望者は高卒層と大卒層の差が比較的小さい。とはいえ、2倍程度の開きはあり、私立・国立中学校志望者ほど顕著ではないが、母親の学歴が高いほど受験をする傾向はみられる。

④第四に、私立・国立中学校の志望者は、受験予定と母親の学歴の関連が強い。高卒層と大卒層で3倍程度の開きがある。この差は、88年調査と比べて拡大している。

図表4-13 受験予定率／比（母親の学歴別）

	●受験率 (%)				●比			
	1988年		2007年		1988年		2007年	
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
高等学校	25.0	21.7	12.3	9.3	1.00	1.00	1.00	1.00
短期大学・専門学校	42.3	38.1	26.1	12.0	1.69	1.76	2.12	1.29
大学・大学院	56.0	57.5	39.4	18.1	2.24	2.65	3.20	1.94

注：「中学校」「その他」「いない」（母親に相当する人がいない）は、サンプルが少ないため省略した。無回答・不明は分析から除外した。

(2) 父親の学歴の規定力

これと同様の分析を父親の学歴についても行った（図表4-14）。大きな傾向は母親と同じだが、次の2点のみ違いがみられた。

①ひとつは、88年も07年もともに、大卒層は高卒層の2倍程度の確率で受験（検）をさせている。差の開きは2時点でもほとんど変わっておらず、高学歴層のほうがより受験をさせるようになっているとは言えない。

②ふたつには、07年調査の第一志望別の特徴が、母親に比べて顕著である。父親の場合は、高学歴だと私立・国立中学校を第一志望にする確率が高い。これは、母親に比べて、父親の学歴は収入に強く結びついているためだろう。それに対して、公立中高一貫校を第一志望とする場合は、受験予定率と学歴との関連はみられなかった。

図表4-14 受験予定率／比（父親の学歴別）

	●受験率 (%)				●比(高等学校卒を「1」とした)			
	1988年		2007年		1988年		2007年	
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
高等学校	23.0	23.0	9.9	13.1	1.00	1.00	1.00	1.00
短期大学・専門学校	27.0	26.8	14.4	12.4	1.17	1.17	1.46	0.94
大学・大学院	47.7	48.8	35.7	13.2	2.07	2.12	3.62	1.00

注：「中学校」「その他」「いない」（父親に相当する人がいない）は、サンプルが少ないため省略した。無回答・不明は分析から除外した。

以上、親の学歴の規定力についてまとめると、以下のようなことがいえる。

①88年も07年も高学歴層ほど高い割合で中学受験（検）を予定している。しかし、②受験予定率の差は、いずれの時点も、高卒層「1」に対して大卒層は「2」倍程度であり、母親でわずかに差が拡大しているものの、大きな変化があるとは言えない。そのなかで、③「公立中高一貫校」は相対的に低い学歴層の保護者にまで開かれている。とくに、父親の学歴は受験予定との関連がほとんど見られない。これに対して、④「私立・国立中学校」は高学歴層ほど受験をさせるという傾向が強い。また、その傾向は、88年当時よりも強まっている。

5) 有職の母親がいる家庭での受験が拡大

次に、母親の就業状況が中学受験（検）に与える影響を確認しよう。図表4-15は、母親の就業状況ごとに受験予定率を示した。さらに、「専業主婦」の受験予定率を1としたときの比を表した。

ここからは、主に次のようなことがわかる。

①第一に、88年調査の時点では、母親が「専業主婦（無職）」であることが重要な意味をもっていたが、07年調査では有職者にも中学受験（検）が広まっている様子がうかがえる。受験（検）をする確率について、「専業主婦（無職）」の母親を「1」とすると、88年調査では「アルバイト・パート」0.34、「常勤（フルタイム）」0.44と半分にも満たなかった。しかし、07年調査では、いずれも0.8程度になった。

②第二に、ここでもやはり、私立・国立中学校志望か公立中高一貫校志望かで傾向が異なる。私立・国立中学校志望者は「専業主婦（無職）」や「自営業（手伝い含む）」が、公立中高一貫校志望者は「アルバイト・パート」や「常勤（フルタイム）」が、相対的に高い確率で現われている。

図表4-15 受験予定率／比（母親の就業状況別）

	●受験率 (%)				●比(専業主婦を「1」とした)			
	1988年	2007年			1988年	2007年		
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
専業主婦(無職)	48.0	41.7	29.6	12.1	1.00	1.00	1.00	1.00
アルバイト・パート	16.2	34.9	23.0	12.0	0.34	0.84	0.78	0.99
常勤(フルタイム)	21.2	32.1	16.8	15.3	0.44	0.77	0.57	1.26
自営業(手伝い含む)	37.9	46.8	35.1	11.7	0.79	1.12	1.19	0.97

注：「その他」「いない」（母親に相当する人がいない）は、サンプルが少ないため省略した。無回答・不明は分析から除外した。

6) 専門・管理職以外の父親がいる家庭での受験が拡大

最後に、父親の職業と中学受験（検）の関連を見てみよう。図表4-16は、父親の職業（職種）ごとに受験予定率を示した。さらに、「専門・管理職」の受験予定率を1としたときの比を表した。

ここからは、主に次のようなことがわかる。

①第一に、88年も07年もともに、受験（検）させる確率が高いのは「専門・管理職」と「自営商工業」であり、「販売・サービス・技術職」がもっとも低い。構成比率は変化したが、全体の構造は変わっていない。

②第二に、07年の全体を見ると、88年に比べて「事務職」「販売・サービス・技術職」の受験（検）が増えている。これは、07年調査では、公立中高一貫校の志望者に、これらの職業が多いためである。

③第三に、私立・国立中学校の志望者に限ると、職業ごとの受験確率は88年と大きく変わっていない。07年も、私立・国立中学校志望者は、父親が「専門・管理職」「自営商工業」である確率が高い。

図表4-16 受験予定率／比（父親の職業別）

	●受験率 (%)				●比(専門・管理職を「1」とした)			
	1988年	2007年			1988年	2007年		
	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校	全体	全体	私立・国立 中学校	公立中高 一貫校
専門・管理職	45.9	48.1	34.4	13.8	1.00	1.00	1.00	1.00
事務職	22.0	37.7	16.9	20.8	0.48	0.78	0.49	1.51
自営商工業	40.9	48.1	35.1	13.0	0.89	1.00	1.02	0.95
販売・サービス・技術	14.6	24.0	14.3	9.7	0.32	0.50	0.42	0.71

注：「専門・管理職」は「専門職」と「管理職」を合わせた。また、「販売・サービス・技術」は「販売職」「運輸・通信関係の職」「生産・労務関係の職」「保安・サービス関係の職」を合わせた。「その他」「無職」「いない」（父親に相当する人がいない）は、図表から省略した。無回答・不明は分析から除外した。

(4) 中学受験の変化—まとめ

ここまで述べてきたような変化は、何を意味するのだろうか。

第一に、中学受験（検）の量的な拡大によって、今までは受験していなかった層まで受験（検）行動が広がっていることが読み取れる。88年調査当時は、おもに暮らし向きが豊かで母親が専業主婦といった家庭が中心になって子どもを受験させていたが、07年調査ではその構造があいまいになった。受験（検）予定者全体の数値で見ると、暮らし向きが豊かではない層や母親が仕事をしている家庭での受験（検）が増えている。

しかしながら、第二に、私立・国立中学校の受験に限ると、家庭の経済的な要因や文化的な要因がより強く作用するようになっている。私立・国立中学を志望する家庭では、通塾日数・時間や塾に支払う費用が、88年と比べて増加している。このために、そうしたコスト投下に耐えられる暮らし向きの豊かな層や学歴の高い層の比率が高まった。

第三に、受験層の拡大に、公立中高一貫校が大きな影響を与えている。今のところ公立中高一貫校は、私立・国立中学校ほどに受験準備を必要としないために、投下コストを抑えることができる。このハードルの低さが、高学歴ではあるが暮らし向きが豊かでなかったり、母親が仕事をしていたりする家庭での受験を可能にしている。公立中高一貫校は、中学受験（検）が経済階層・文化階層の上位に閉ざされる傾向を是正しているとみることもできる。

とはいえ、第四に、公立中高一貫校の受験にしても、誰にでも参加できる競争ではないことを認識しておく必要があるだろう。ここでは詳しく述べなかったが、公立中高一貫校を志望する層は、受験させない（地元の公立中学校に進学する）層と比べると、暮らし向きが豊かで学歴が高い保護者が多い。私立・国立中学校を対立軸としたときに、公立としてより安い費用で高水準の教育を提供することは大きな意義がある。しかし、同時にそのことが、優秀な生徒を地域の公立中学校から奪う結果になりかねない。地域の公立中学校が空洞化しないような方策もあわせて考える必要があるだろう。

(木村 治生)

第5節 中学校選択とペアレントクラシー

◇ペアレントクラシー

ペアレントクラシー（parent 親+cracy 支配）とはイギリスのP. ブラウンの概念で、保護者の財力と文化が子どもの達成を左右する社会をいう⁽¹⁾。ブラウンによると、教育的選抜は、かつては業績主義（メリトクラシー）のイデオロギーと「総合的な」教育の導入に基づいていたのに対し、現在は、「市場」原理と「ペアレントクラシーのイデオロギー」と呼ばれているものに基づいており、生徒本人の「能力と努力」よりも親の財産と願望に基づく教育選抜になっているという。「能力+努力=業績」という方程式は、「資源+嗜好=選択」という形に変容したのである。

しかしこのとき、どのような財力や文化がどのようなメカニズムで子どもの社会=経済的達成を左右するのは彼の論文では明確でない。そのような事情もあり、ブラウンの概念をそのまま日本にあてはめることには躊躇せざるを得ない。

◇イギリスの中学受験と日本の中学受験（検）

今日のイギリスでは、私立学校進学や公立学校選択は、受験勉強の面では比較的容易である。そのような状況なのでイギリスの教育選抜では子どもの「業績」よりも親の「財力や文化」が結果を左右する。

これに対して日本の国立中学・私立中学への進学は受験勉強が容易ではない。そこでは、「選択」だけでなく「業績」が結果の強い規定要因となる。

このとき、「業績」が本人の「能力+努力」と同値であれば、日本の中学受験（検）はメリトクラティックな選抜であるといえることができる。しかしながら、日本の中学受験（検）準備は学校教育の外で行われるので家庭の影響を強く受ける。また、俗に「中学受験は親の受験」と言われているように、日本の中学受験（検）では親による「世話」が「業績」に対して強い影響力を持つ。日本の中学受験（検）では、「努力」の部分で親の支援が欠くことの出来ないものとなっているのである。日本ではイギリスとは異なる様式で、すなわち「選択」だけではなく「業績競争」においても、ペアレントクラシーが支配的な教育選抜となっている。

◇ペアレントクラシー、メリトクラシー、教育選抜についての仮説

図表5-1でブラウンを参考にしつつ、中学受験（検）を従属変数としたときの、日本のペアレントクラシーと「選択」、「業績」の関係を5つの状況に分けて整理しよう。

①メリトクラシーの教育選抜

メリトクラシー社会では、能力と努力がメリットとなり効力を持つ。上述のブラウンの「業績」は「能力+努力=業績」と定式化されるものであり、図表5-1のメリトクラシーそのものである。

②ペアレントクラシーの教育選抜

ブラウンが検討の対象とするペアレントクラシーの社会では、親の「資源+嗜好=選択」、が教育選抜を決定づけている。イギリスの中等学校では日本のような激しい受験戦争は無いので、親がどの学校を選択したかがどの学校に入るかに強く影響する。

③従来の学歴主義の教育選抜

これに対して、日本の従来の学歴主義の教育選抜では、「能力+努力=業績」が学歴を決める重要な要素であった。しかし、日本は純粋なメリトクラシーの社会ではなかった。親による塾、家庭教師、教材などへの戦略的な資源投入が子どもの「努力」に影響を与え、結果として「業績」の差を産みだし

ていたからである。日本型のペアレントクラシーでは、親の「資源」が業績にまで強く影響を与える。お茶の水女子大学の調査では親の富と期待が子どもの数学の成績に影響していた⁽²⁾。

④ 従来の中学受験の教育選抜

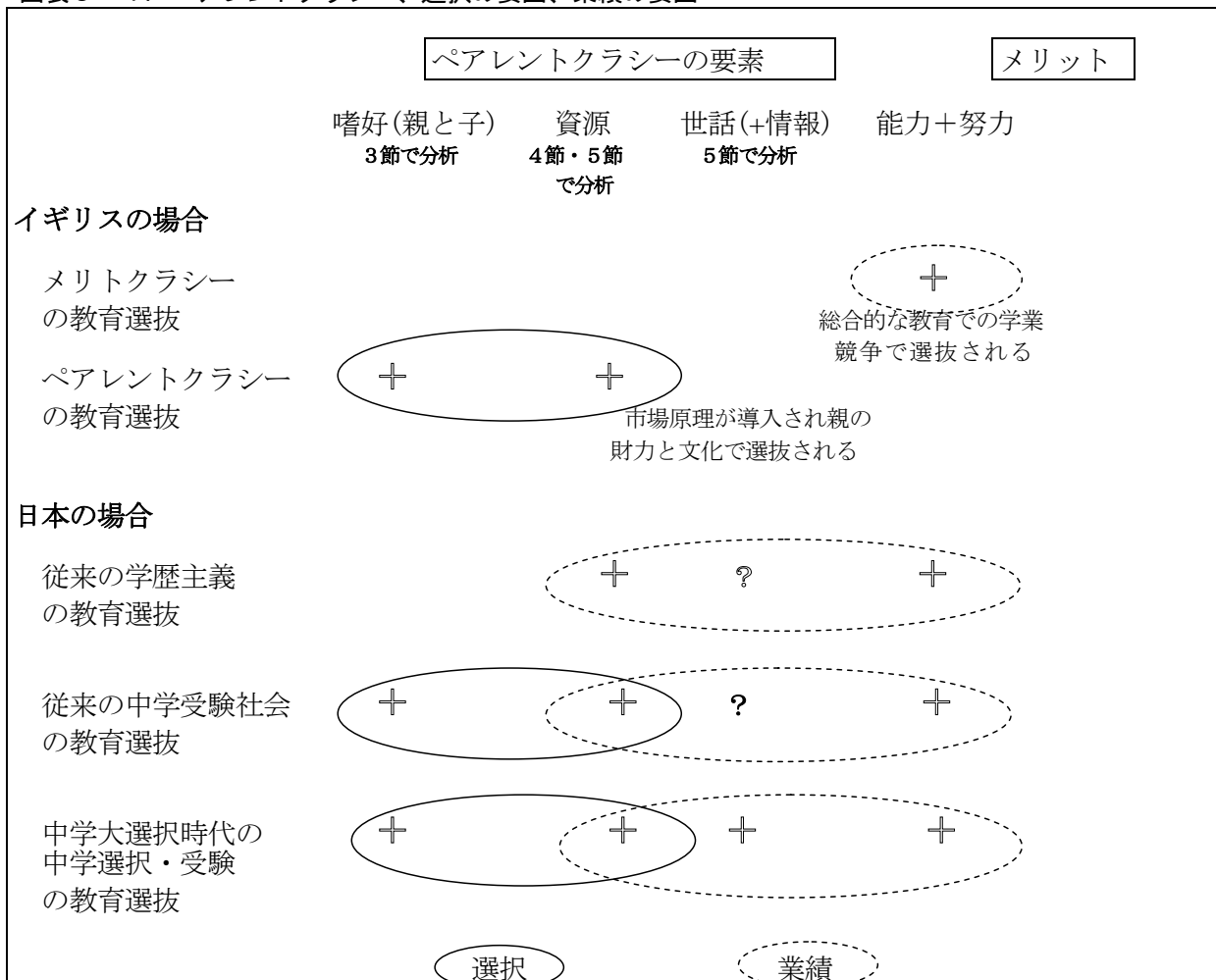
われわれが従属変数とする中学受験（検）をめぐるのは、従来の中学受験では、「業績」と「選択」の2つの選抜が同時に働いていた。上述の学歴主義の教育選抜で見たように親の資源投入が「業績」を強く規定していたほか、親（と本人）の「嗜好」、例えばお嬢様学校志向、ゆとり志向、スポーツ志向などが「選択」を強く規定していた。

⑤ 中学校・大選択時代の教育選抜

最後に、「中学校・大選択時代」の教育選抜でも、「選択」と「業績」の2つの選抜が同時に働いている。しかし、以前の時代と比べて2つの点で異なる。一つは公立中高一貫校という授業料（無料）と受験準備の両側面で低コストな選択肢ができたことである。公立中高一貫校は親の富の規定力は弱いことが予想される。もう一つは、「業績」に影響を与える変数として資源投入のほかに親の「世話」という独立変数が加わったことである。日本の中学受験（検）では「資源+世話+能力+努力=業績」という関係が作られているのである。

ペアレントクラシーの観点から予想すると、イギリスのペアレントクラシーでは、親の「資源+嗜好」がもつばら「選択」に影響するのに対して、日本のペアレントクラシーでは、親の「資源」と「世話」が業績に影響を与えている。

図表5-1. ペアレントクラシー、選択の要因、業績の要因



ペアレントクラシーのコノテーションには社会的格差がある。ブラウンのペアレントクラシーの議論は、新中間層の教育戦略に注目し、社会階層の視点を取り込んだ概念である。

しかし、本報告では、いったん、社会的なグルーピングのことは視野の外に置く。誰が新中間階層で誰が労働社会階層かというような社会的カテゴリーを考えずに、変数としての親の「文化や資源」、「世話」が業績に影響を与える様子を見る。

(1) 中学受験（検）では学習塾利用が当たり前のようになっている

第3節・第4節で見たことの確認

図表5-2. 受験（検）の有無と塾の利用目的

	私立・国立中 307人	公立中高一貫 115人	非受験 555人	全体 988人
中学受験をするためには塾は欠かせない	94.8	79.1	58.4	72.3
塾に行ったおかげで心身がたくましくなった	53.4	33.0	25.9	35.7
塾の先生の方が学校の先生より教え方が上手だ	75.6	62.6	50.8	60.1
学習塾に行かないと学校の授業についていけない	3.3	7.8	23.2	15.2
小学校の勉強より塾の勉強を優先させたい	35.8	12.2	6.5	16.7

注) 「とてもそう思う」と「そう思う」の合計。

中学受験（検）、とくに私立・国立中受験にとって、「塾は欠かせない」と評価されている。また、これは、受験知の学習にとってであると思われる（信じたい？）が「塾の先生の方が学校の先生より教え方が上手だ」と考えられている。

(2) 業績競争に必要な“資源（教育費）”とその規定要因（世帯収入）

親の世帯収入が「進学機会」に与える影響について検討してみよう。

ここでは、社会的属性の視点を取り入れることで、社会的属性がどのように機会を制限するかを検討する。

「進学機会」を、分析的に「受験準備機会」と「在籍機会（授業料、文化）」の2つの側面に分けて考えると、イギリスでは、私立学校の授業料が高額（報告者の子どもが通っていた田舎の私立校で年間£15,000⇔300万円くらい）である。また、社会階層の壁もある（誕生日に呼ばれたら、門から“お屋敷”までさらに数分かかった）ので労働者階級の子どもの私立学校への在籍機会が強く制限されている。

日本の場合はどうであろうか。最初に「進学機会」から見ると、前節で見たように、東京では88年と比べて07年は暮らし向きと受験機会の相関が強くなっている。そして、作表しなかったが、07年の全国データでも世帯収入と受験率のクロス集計では「私立・国立中学」受験率は、「800万円以上」が29.2%、「600～800万円未満」が14.6%、「600万円未満」が7.4%であった。明らかに世帯収入と受験率とには強い相関がある。

次に在籍機会と受験準備機会の2つの機会に分けて、日本の中学進学機会を検討してみよう。

まず、在籍機会であるが、日本では私立・国立中の授業料は公的助成によってある程度押さえられている（東京のいわゆる男子御三家で初年度が100万円くらい。2年目からは70万円くらい）。しかも、奨学金もある。そして、門から玄関まで数分かかるような家はめったにないので文化的なハードルはイギリスよりも低いといえる。このように在籍機会については、イギリスほどハードルは高くない。

受験準備機会についてはどうであろうか。一般に私立・国立中受験では下の囲み記事のように塾代が高額である。

国立・私立中学受験の高額な教育費の内訳

大手進学塾では毎月の月謝に加え、長期休みなどに行われる講習費や教材費、テストなどの出費もかかる。これだけで年間100万円以上になる。さらに、進学塾の授業について行くために個別指導や家庭教師が必要な場合がある。 **B社ホームページをもとに作成**

この後、親の世帯収入と教育費月額に焦点を当て、中学「受験（検）準備機会」を検討しよう。一般に高額な塾代が必要と思われている受験準備費だが、実際には親の世帯収入が子どもの中学受験準備を“決定的に”制限しているわけではない。

「世帯収入」と「受験率」に「教育費月額」の変数を入れて2重クロス集計をしてみると、世帯収入が低い家庭でも、いったん、私立・国立中学を受験させるとなると、**図表5-3**のように、受験に“十分な”教育費を支出する傾向があるからである。

図表5-3で「私立・国立中」を第一志望とする子どもの家庭では世帯収入と教育費月額「2万円未満」と「8万円以上」とについては強い相関が見られる。このことから世帯収入の高い家庭の子どもは資源投入による受験準備機会の獲得において有利であることが分かる。

しかし、「世帯収入600万円未満」でも私立・国立中を受験する場合は教育費が「5万円～8万円未満」と「8万円以上」を合計すると53.6%になる。これは進学塾に通うという意味では十分な金額である。さらに「2万円～5万円未満」も30.4%ある。これは週2回程度の塾通いには十分な額である。このことは、世帯収入の額が必ずしも世帯の経済的余裕の指標とはならないこと、あるいは、やりくりによって、ある程度の教育費の捻出が可能なことなどの可能性を示している。

また、第4節で見たように、受験準備の中味や受験先によっては教育費の支出を押さえて受験することができるのである。日本の場合、家庭ごとの世帯収入の差違が受験準備のために必要な資源投入を“決定的に”制限しているわけではない。

なお、第4節で見たように、公立中高一貫校の進学機会は「暮らし向き」との相関が弱かった。そして「公立中高一貫」受検については、もともと費用が安いせいもあり（2万円未満でも受検準備は可能であり5万円では十分よりも多い）、世帯収入の差違が受検準備機会獲得に必要な資源投入の制限要因にはならないのではないか。

図表5-3. 世帯収入別に見た第一志望学校と子ども1人にかかる教育費月額（保護者調査）

	600万円未満				600～800万円未満				800万円以上			
	私立・ 国立中	公立 中高 一貫	非受 験	全体	私立・ 国立中	公立 中高 一貫	非受 験	全体	私立 ・国立 中	公立 中高 一貫	非受 験	全体
	56	38	656	757	68	35	360	465	150	48	311	513
2万円未満	12.5	42.1	63.6	58.4	5.9	20.0	54.4	44.5	2.7	14.6	42.8	28.7
2万円～5万円未満	30.4	42.1	23.0	24.7	42.6	62.9	34.4	37.6	12.7	52.1	43.7	35.1
5万円～8万円未満	41.1	10.5	0.8	4.4	26.5	14.3	1.7	6.5	44.7	29.2	4.8	18.9
8万円以上	12.5	2.6	0.3	1.3	22.1	2.9	0.3	3.9	39.3	4.2	0.6	12.3
無答不明	3.6	2.6	12.3	11.2	2.9		9.2	7.5	0.7		8.0	5.1

(3) 学校選択の基準は“教育的”である

親の「文化（嗜好）」つまり価値観や教育観の構造とそれらに基づいた中学選択については、すでに第3節で検討している。そこでは、進学面や偏差値以外の側面からも学校選択をしていることが明らかになっている。ここでは学校選択の基準が“教育的”であるという観点から簡単な紹介（インタビュー結果の紹介）を行うにとどめたい。

図表5-4は、インタビュー調査で学校選択の基準を尋ねた結果である。

図表5-4. 学校選択の基準

きっちりした学校は息苦しくなるのでやめた。ある程度自由にできる要素があるところが良い。サッカーがやりたいというので、サッカー部があって、部活が充実している学校が良いと思った。(難関校進学A)

学校説明会をやってくれるところがあると、お母様の雰囲気はすごく目についた。校長先生や責任者と話すときにすごく遅刻をしてくるお母さんが多い学校もあった。それで悪びれもせずに、横切ったりする姿を見て、この先、この中学に入ったとしたら、こういうお母様に育てられたお子様と一緒に過ごすのかなと思ったら不安になった。(難関校進学B)

- ・結局は子どもに向いている学校を選んだ。性格的に、人とどんどん競っていくようなタイプではないので、わりと自分というのを見つめたりゆっくりできるほうが子どもには向いていると思った。どんどん飲み込んで、先に進めるような子だったら、いろんなところで活躍できると思うが、うちのはじっくりタイプだから、あまりスピードが早いところは向かないかと思った。
- ・文化祭、体育祭を見ているうちに、子どももどうしてもこの学校に行きたいというのが出てきたので、それが合っているのかもしれないと思った。(難関校進学C)

- ・子どもは文化祭は楽しかったと言っていた。面白いコメントが載っていたらいい。文化祭のパンフレットの作りが面白く、コメントが面白かった。文化祭のポスターも面白いのがいっぱいあった。ここに行ったら面白い先輩がいっぱいいるということで、勉強も見せてくれて、通学にも良いし、良いのではないかということになった。
- ・単身赴任で夫がいない中で、中学、高校生活を送るので、女の子なので、できるだけトラブルが少ないほうが良いと思った。だったら、私立が良いかなと思った。女の子だからというのは、多少あった。(難関校進学D)

プールがある学校というので決めた。塾が薦めてくれた学校で、プールがなかったり、プールが小さいとボツにした。(難関校進学E)

偏差値で受験先が制限された上でのことであるが、親は勉学や進学（C、D）だけでなく、子どもの性格や個性、学校生活の好ましさ（A、B、E）で中学を選んでいる様子が分かる。

(4) 業績を規定する「世話・情報行動」変数の中味

業績争いが重要な部分を占める日本の中学受験（受検）では親の世話や親の情報行動が業績争いに影響を与える。

図表5-5で、「私立・国立中」を受験させる親は「勉強を教える（74.3%）」「勉強している内容を確認する（80.2%）」など、「非受験」の親よりも子どもの勉強の直接の「世話」をする割合が高い。また、「美術館や博物館に連れて行く（46.9%）」や「子どもにいいと思う体験を積極的にさせている（82.0%）」といった広い意味での勉強の支援を行っている。これらは、“文化”にあたることでもある。また、「テレビやゲームなどの時間を決める（74.6%）」という勉強環境の整備を行う割合も高い。

図表 5-5. 両親による普段の学習支援

	第一志望の学校		
	私立・国立中	公立中高一貫	非受験
	339人	156人	1762人
勉強を教える	74.3	69.2	66.9
勉強している内容を確認する	80.2	76.9	66.9
本を読むようにすすめる	77.9	83.3	72.9
美術館や博物館に連れて行く	46.9	48.1	27.4
テレビやゲームなどの時間を決める	78.2	74.4	70.4
子どもにいいと思う体験を積極的にさせている※	82.0	80.8	70.6

注：数字は「よくある」＋「時々ある」
 ※の数字は「とてもそう」と「わりとそう」の合計

次に、図表 5-6 で情報収集への積極さを訪ねた結果では、中学受験（受検）をさせる親は父親も母親も情報集に積極的である。積極的な割合は、公立一貫校受検よりも私立・国立中受験のほうが高い。

図表 5-6. 情報収集への積極的さ

	第一志望の学校		
	私立・国立中	公立中高一貫	非受験
	339人	156人	1762人
母親	90.0	78.2	59.9
父親	44.8	37.1	24.4

注：数字は「とても積極的」＋「まあ積極的」

子どもの受験勉強の世話は、アンケートではその実態がなかなか捉えきれない。そこで、われわれはインタビューを行った。表 5-7 にある事例は、首都圏の難関私立・国立中と中堅私立・国立中学に子どもを進学させた母親にタイするインタビューの結果から、親たちが子どものもの合格のためにどのような世話をしたかを見たものである。

ホクシールド⁽³⁾がCAの労働を分析するに際して、そして崎山⁽⁴⁾が看護職の労働を分析するに際して「感情労働」の概念を用いているが、子どもに難関校・中堅校を受験させる親は、肉体的、頭脳だけでなく感情的にも非常に辛い世話を強いられていることが分かる。なお、「感情労働」は相手の感情にタイするサービスであり、そのために自分自身の感情を商品化するサービスでもある。ただし、受験の親の場合は経済用語で商品化とぼっさりと切ってしまうより献身とでもいふべきであろう。

図表 5-7. 世話の事例 _____ 頭脳労働 肉体労働 ~~~~~ 感情労働

・夫は帰ってくるのは遅いが、夜中に、明日やることリストを夫がパソコンで作って、やったらチェックするということにした。でもそれを最後まで息子はやらなかった。ペースチェックは夫がやっていた。
 ・一番怖かったのがインフルエンザだったので、家族全員で、予防接種を受けた。テレビで、インフルエンザウィルスはコートにつくというので、家族で、外でコートをはらった。
 ・家に帰ったら、手洗い、うがいということで、紙に貼っておいた。
 ・やる気ないならやめなさいばかり言っていた。
 ・子どもには、言っではいけない一言をいっぱい言った
 ・あんた負けたんだよみたいなことを言ってしまった。あまり子ども自身が、自分がついことを言っても、折れない子。実家の母にも何の反省もないと言っていたら、今時メンタルが弱くて、挫折して駄目になる子が多い中その強さは、絶対将来強さになると言われて、そういわれたらそうかなということで、それがこの子の良いところという見方をするようになった。思ったよりずっと、ずっと強い。(難関校A)

・典型的な塾にお任せタイプ。自習室を使っていたというのがあるが、わからないことは先生に聞きなさいと言った。6年生の2学期終わるぐらいまでは、何を習っていたかさえわからなかった。その後過去問題を始める時に過去問題のコピーをとって、丸付けは先生はしたが、戻ってきたものの、点数を控えたりとか、過去問題のチェックだけはしていたが、内容はお任せだった。
 ・風邪をひかないように、初めて加湿器を置いた。粉末ビタミンCを家族全員で飲んで、・・・毎日インフルエンザになりませんように祈った。
 ・夫と話しが合わないというはなかった。自分が学校説明会で聞いて、ここは良かったとか言うと、そのまま洗脳されて、ここは良いと思うタイプだったので、特に問題はなかった。
 ・学校の合格発表を見に行った時に、すごく喜んだ。抱き合っただけ泣きあつたぐらい。家族で目標を持って進めたというの、絆が強くなったと思う。(難関校B)

・自分自身は、子供のやったものの丸つけをして、できなかったところを、もう1回やるように、よけておいた。塾の宿題、課題の丸つけをした。
 ・わからないところは、塾で聞くか、主人が教えるかをしていた。でも、だんだんママにはわからないからと、子どもが言い出した。
 ・家族全員、外ではマスクをしていた。 (難関校C)

・5年生からお弁当を持って行っていた。お弁当が、家族の夕食と同じように、メニューを考えた。お弁当は偏ると思うから。うちの子は、パンを買ったりするのは嫌だと言う。パートをしているので、作れない日もあったがそういう時は、後から塾に持って行ったりした。
 ・近くなったら予防接種を家族で受けた。
 ・家族中で、外に出る時は、必ずマスクということをしていたが、年末にインフルエンザにかかった。5年の終わりのときに、クラス分けテストで失敗して、子供の顔つきが替わったので、落ちてからやめたら、これでは負け犬になるから、やめるにしても、クラスが上がったらやめなさいと言った。
 ・あとは、言葉がけ。上の子のときにガンガン言っても、行き詰まった時があって、塾の先生に言ったら、お母さん、何と言ったら、勉強しようと思いませんか？と言われた。本人が一番わかっているから、言わないで下さいと言われた。だから、下の時も、言葉がけをした。これとこれ間違っていたでしょとテストのときは言っていたけど、なぜ間違ったか考えてみてよと言う。計算間違いだと言っていたが、今度はやめようねと言ったりした。自分で考えて、自分でわかるようにした。 (難関校D)

・内容に関しては、・・・お母さんの発想では無理と言われてやめた。毎週テストがあるが、テストの間違ったところは、全部ラインマーカーを引いた。正解率が出るので、何%と書いておいて、30%以下のものは、やらなくて良いけど、それ以上のところはやりなおすように必ず、見直しするように言っている。中身は見えていないが見直しをやったかどうかの管理と、問題がB5サイズだが、ファイリングはしてあげた。
 ・夫は、平日は遅い。土日である時に、こんなのわからなかったよと言ったら、見てあげたりした。1月のお正月は、びっちり特訓していた。苦手なところが浮き上がってくるし、テストがデータで出てくるから、本人がわかっているから、その部分の問題を出した。解けないから、横についてやって、お姉ちゃんも例題を作ったりして最後はみんなです。自分は横で、頑張れと言っていた。
 ・第一志望校を落ちたときも、「だから言ったでしょ」と喉まで出てきたが、言わなかった。それを言わなかったので、20日間ぐらい、もやもやした。1月14日の連休の時の模試を受けたが、その前の日は家族総動員だった。できないところが、できるまで家族が見守った。口に出さない子だが、ありがたうみたいな感じがあった。
 ・夏休みの終わりにのんきにしているから、塾やめようかと言ったら、頑張ると言っていた。何もしないで、のほほんとする空間が良いから、塾をやめようと言ってみただけど、本人は子どもだから続けようという感じで、ずっと続けていた。お姉ちゃんも、お母さんいつ損害賠償請求するのと言っていた。そのチャンスを逃した。 (難関校E)

・よそ様に聞こえるぐらいお互い大声になったりした。半泣きどころじゃなかった。 (中堅校A)

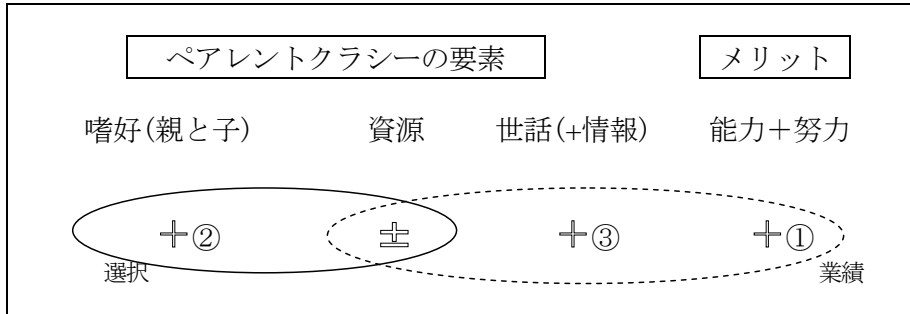
・毎週のテストがしんどかった。日曜日にテストを受けると、火曜日に成績が出る。会員がアクセスできる。子どもが出る前に自分が見ると、自分が機嫌が悪くなる。成績悪いと、席が後ろだから、行きたくないと言ったり、良い時は、意気揚々としている。テストに左右される。お互いストレスになった。見れないほうが逆に良いのと思ったぐらい。 (中堅校E)

◇第5節のまとめと考察

- 1) この節では、P. ブラウンの研究を引用しつつ、日本の中学受験（検）の教育選抜における「選択」と「業績」の状況を検討した。
- 2) 日本では中学受験（検）は、受験（検）準備機会が塾という学校外教育で行われているのが特徴である。ここに親が教育選抜に影響を与える余地が生まれる。
- 3) 日本では、資源と嗜好によって「選択」に、資源と世話によって「業績」親の教育選抜への影響が及んでいる。
- 4) 日本では資源のうち、塾への支出はやり方次第で押さえることができる。また、世帯収入の低い家庭でも私立・国立中を受験する場合には塾への支出を十分に行っているケースがある。したがって、塾の費用が子どもの「業績競争」参加の機会を“絶対的に”奪うものとはなっていない。
- 5) 世話には、肉体労働、頭脳労働、感情労働の各側面が含まれている。

雑誌などの情報だと難関私立・国立中学にはそうでない私立中学よりも、専門職や管理職の子どもが多い。中学受験（受検）をめぐる「選択」と「業績競争」の結果には「社会階層間」で偏りがある。

われわれの調査では「資源」の指標を世帯収入としているが、この条件下では、世帯収入ごとの受験準備機会の差は決定的には大きくなかった。それなのになぜ、選抜の結果に雑誌がいうような「社会階層間」の大きな偏りが生じるのだろうか。



次のような可能性が考えられる。

- ①社会階層ごとに子どものIQなどに偏りがあり、「能力+努力=業績」の「能力」の部分に階層ごとの差があるのだろうか。
 - ②第3節の分析で、受験する中学のタイプごとに親の期待が異なることが分かっている。難関私立・国立中進学は「嗜好」や「資源」の影響力が大きいのであろうか。
 - ③第5節で「世話」が「業績競争」の重要な要素であることがわかった。この「世話」の遂行機会ないしは遂行様式に社会階層間の差があるのだろうか。
- 今後、②と③についてさらに検討したい。

最後に、公立中高一貫校は“受検倍率”が異常に高い。第4節で見たように、都内だとおよそ10倍になる。多くの受検者が“不合格”となる。したがって、第4節の繰り返しになるが、公立中高一貫校は低い社会的属性の家庭の子の「受験（検）機会」を拡大しているが、それが「進学機会」の拡大に容易につながらないのである。公立中学校の構造を再検討する中で「進学機会」を増やすことを検討すべきではないだろうか。

<第5節 注と引用>

- (1) P. ブラウン「文化資本と社会的排除」、P.ブラウン、AH. ハルゼー、H. ローダー、A. S. ウェルズ [編] 『教育社会学—第三のソリューション』1-90 頁、九州大学出版会。
- (2) 耳塚寛明「誰が学力を獲得するのか」、耳塚寛明、牧野カツコ [共編著] 『学力とトランジションの危機—閉ざされた大人への道』金子書房 2007、3-23 頁。お茶の水女子大学教育社会学研究室調査がある。お茶の水女子大学調査の知見では、算数の学力(変数)を左右する要因(変数)のベスト・スリーは、1. 学校外教育費支出(学習塾、けいこごと、通信教育などに支出する教育費)、2. 保護者学歴期待(どの段階までの学歴を子どもに期待するか)、3. 世帯所得であるとされている。
- (3) A. R. ホックシールド『管理される心 感情が商品になるとき』世界思想社、2000年。
- (4) 崎山治男 『「心の時代」と自己 感情社会学の視座』、勁草書房、2005年。

(樋田大二郎)